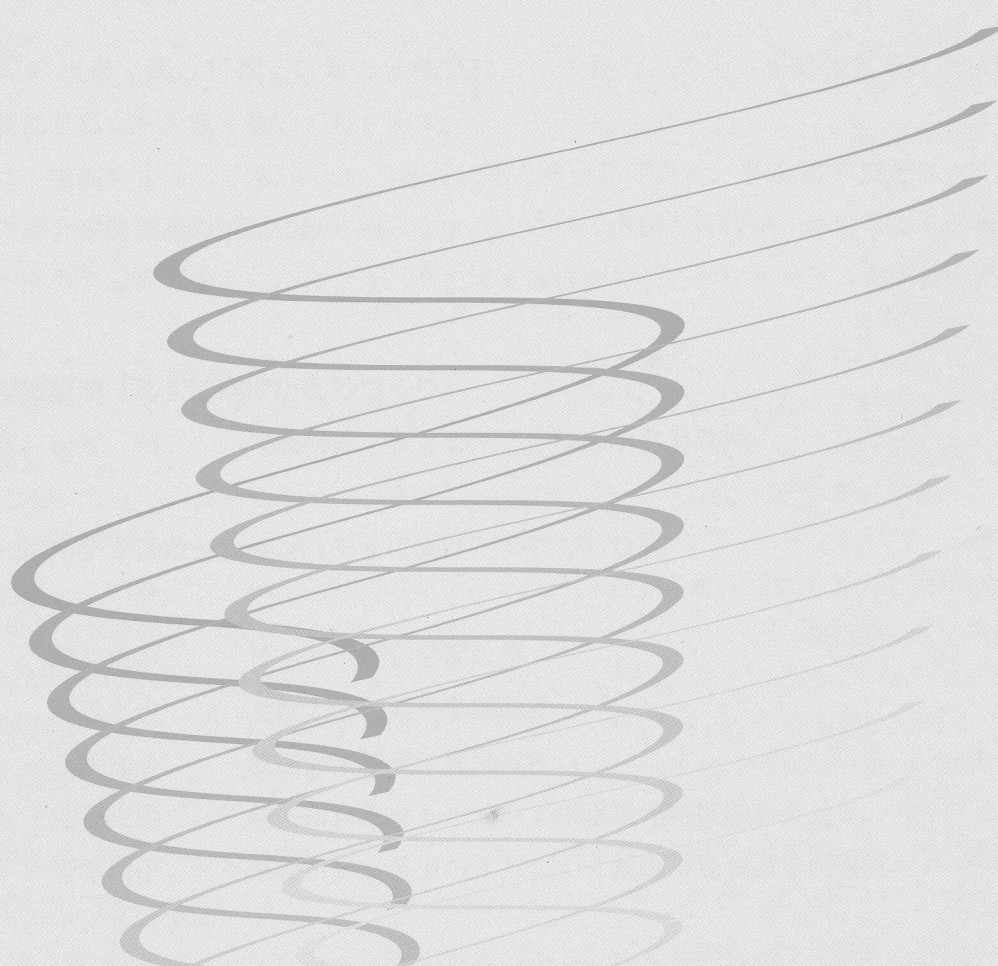


# 市制40周年記念 まちづくりフォーラム報告書



## 目次

市制40周年記念まちづくりフォーラム …1	
「あすに向けたまちづくり」	
市長挨拶 ……………2	
越谷40運営委員会委員長挨拶 ……………3	
基調講演 ……………4	
パネルディスカッション…………13	
アンケート集計結果…………34	

## 市制40周年記念 まちづくりフォーラム

# あすに向けたまちづくり

**主 催**／越谷市・越谷 40 運営委員会                      と き：平成10年6月20日（土）午後1時～5時  
**後 援**／越谷市コミュニティ推進協議会                      と ころ：中央市民会館 劇場

**目 的** 21世紀の到来を間近に控え、地方分権型社会への移行、少子・高齢化対策、環境問題など様々の課題が私たちを取り巻いております。

市では、市制を施行して40年という節目にあたる今年度から、平成12年度をスタートとする第3次の総合振興計画の策定に取り組みます。そこで、市民と行政が一体となって、あすの越谷が豊かで活力あふれるまちになるよう、共に考える機会として本フォーラムを開催いたします。

### 内 容      基調講演「あすに向けたまちづくり」

田村 明                      地域政策プランナー、法政大学名誉教授

### パネルディスカッション「あすに向けたまちづくり」

パネラー

岸井隆幸                      日本大学理工学部教授  
野島正也                      文教大学人間科学部教授  
山田知子                      放送大学教養学部助教授  
澁谷俊雄                      越谷市自然ウォッチング指導員連絡協議会会長  
青木玲子                      越谷市男女共生のまちづくり推進市民会議専門委員

コーディネーター

松岡 宏                      (株)地域総合計画研究所取締役



# 市長挨拶

越谷市長  
板川 文夫

ただ今ご紹介いただきました越谷市長の板川でございます。本日、このように日頃からまちづくりに関心をお持ちの多数の皆さんにご参加をいただき、心から感謝を申し上げます。

皆様のあすに向けたまちづくりの熱意を十二分に感じ、その期待に応えられるよう、さらに気の引き締まる思いであります。

また、本日基調講演をいただきます田村明先生、パネリストとしてご出席をいただきます岸井隆幸先生、野島正也先生、山田知子先生、澁谷俊雄先生、そして青木玲子先生には、都市計画、生涯学習、社会福祉、自然環境、男女共生などそれぞれの専門分野のエキスパートとして日々大変なご活躍をされております。

そのお忙しい中にもかかわらず、ご快諾をいただき、本日ご指導賜りますことに心から深く感謝を申し上げます。

また、本フォーラムを共催していただいております越谷40運営委員会委員長の青木様をはじめ、越谷40運営委員会の皆様、ご後援をいただいております越谷市コミュニティ推進協議会の皆様には、日頃から市政に何かとご理解、ご協力をいただいております。深く感謝を申し上げます。

越谷40運営委員会委員長の青木様には、後ほど主催者としてご挨拶をお願いしたいと考えておりますが、今年は越谷市が市制を施行してから40年目という節目の年にあたり、越谷40運営委員会の皆様のご協力のもと、数々の市制40周年記念事業・行事が開催されております。本日の「まちづくりフォーラム」もその1つの事業であり、本市のあすに向けたまちづくりについて、市民と行政が共に考える機会にしたいということで開催をさせていただいたものでございます。

市では既にご案内のとおり、西暦2000年をスタートとする「第3次総合振興計画」の策定に本年度から本格的に取り掛かる所存であります。この計画の策定にあたりましては、「市民参加」を念頭に進めてまいりたいと考えております。

このため市内13地区において「まちづくり会議」を行いますが、市民の皆様には、是非ともこの会議にご参加をいただきまして、それぞれの視点からご提言やご意見をいただき、将来の越谷市に実りある第3次の総合振興計画を市民と行政が一体となって策定して参りたいと考えております。

皆様には、本日この「まちづくりフォーラム」が、あすに向けたまちづくりへの新たな契機となることを願うとともに、市民の皆様一人一人が「越谷に暮らしてよかった」と思えるようなまちの創造に向け、努力してまいります。

終わりに、皆様の一層のご健康とご活躍をお祈り申し上げ、挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。



## 越谷 40 運営委員会委員長挨拶

越谷 40 運営委員会委員長

青 木 並五郎

ただいまご紹介をいただきました越谷 40 運営委員会の青木でございます。本日は、ここに市制 40 周年記念「まちづくりフォーラム・あすに向けたまちづくり」の開催にあたり、大変多くの皆さんにご参加を賜りここにフォーラムが盛会のうちに実施できますことは、主催者といたしまして誠に大きな喜びであり、心から感謝を申し上げる次第であります。

越谷 40 運営委員会では、越谷市が誕生いたしまして 40 年目となる記念する本年を、30 万市民の皆さんが心一つにしてお祝いをしようと自治会、連合会を初め、商工団体など 47 団体により組織構成され事業運営に携わっております。

市制 40 周年の尊い歴史を振り返ってみるたびに、諸先輩方々の並々ならぬご努力とご苦勞のおかげによりまして、今や越谷市はまさしく大きく発展をいたしました。新しく市民になられた方々、そして古くから住んでおられる方々が一緒になって地域の発展を願い、コミュニティ推進協議会が 13 地区それぞれに設置をされて、市民相互の交流から開かれたまちづくりに向けて努力をされております。地下鉄日比谷線相互乗り入れから JR 武蔵野線の開通、そして東武伊勢崎線の連続立体交差事業など都市基盤整備の推進が着実に図られております。人口も 30 万人を超え、県下 6 番目の都市として本市は大きく発展を遂げてまいりました。

越谷 40 運営委員会では、昨年 11 月 3 日の市民体育祭中央大会から本年 11 月 1 日に挙行いたします市制 40 周年記念式典までの 1 年間を通して、記念事業の PR 活動に携わっておりますと同時に、市民一人一人の皆様方にお力添えをいただきながら最善の努力をしているところであります。西暦 2000 年を間近にスタートとなる第 3 次総合振興計画の策定に当たり、本市の将来のまちづくりについて市民と行政が共に一体となって考えようとするのが本日のフォーラムの一番の狙いでもあろうかと存じます。

今や高齢化社会の到来から私たちを取り巻く環境は極めて厳しいものであろうかと存じますが、市制 40 周年を一つの節目として、ふるさと越谷がもっともっと素晴らしく、真の豊かさを実感できる住みよい街となりますことを心から念願を申し上げる次第でございます。そして、本日の「まちづくりフォーラム」が市民の皆さんが素晴らしいサポーターとなって最も実り多いフォーラムになりますことを心からご祈念を申し上げまして、私のご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。



# 基調講演 (要旨)

## テーマ「あすに向けたまちづくり」

地域政策プランナー、法政大学名誉教授

田村 明

### ・ 40 年前と今の比較

越谷市が市制を始めた昭和 33 年は、神武以来初めての日本が戦後の高度成長を始めた時期で、都市の住み方の一つとして「団地族」という言葉が生まれた。また「神風タクシー」が、めちゃくちゃな運転をしていたし、「フラフープ」がはやっていた。その翌年に「ダッコちゃん」人形をみんな腕に抱かしていた。昭和 33 年に、在来線で一番早かった「つばめ」を抜く「こだま」が走り出した。ただし新幹線ではなく、新幹線ができたのはその 6 年後であった。昭和 33 年 12 月 1 日には「1 万円札」が発行され、これは戦後のひとつの大きな区切りであったという感じがする。この 40 年間の変化は大変なもので、とくに、この 40 年間は変化の激しい期間であった。

越谷市が市制をしいたころには 5 万人そこそこの人口であったが、現在は 30 万人へと増加した。

少し数値を見ると、全国で鉄道を利用した人間の動きは、昭和 33 年ぐらいから現在までに大体総量が 6 倍になっていて、6 倍は大したことはないかもしれないが、他の数値を見てもっとはつきりしている。車の保有台数は 65 倍へ、現在携帯電話は普及しているが、個人と事務所を含めた電話数は約 20 倍である。このようにあらゆるものが変化をしてきたが、これからは量的な変化から質的な変化をしていくだろう。

通信の関係では、インターネットを使うと世界中の情報が行き交っている。それまでは世界の情報がわかるというのは大変なことで、今は実際に行くこともできる。40 年前だったらワールドカップをフランスでやるといっても、日本人では

関係者以外には行かないだろう。渡航も制限があり、外貨を持ち出せないし、特別な人間でないと出られなかった。今はパリに往復 8 万円で行け随分安くなり、今はそれほど苦勞なく海外に行けるご時世になった。

街というものは、非常に動き回っている人たち、世界中どこでも狭くなった人たち、行きたければどこへでも行ける人たち、そして生活の内容が全く変わってしまった人たちが住んでいる所だ。そういう人達が結集すると人口が変わらないでも、中身は大きく変化をする。生活の仕方を見ても、40 年前は畳の生活をしてしたが、今は畳の部屋が一つもないという家もある。まして人口も急増したのだから変化は累乗的に大きい。

「あすに向けたまちづくり」にはどのように変化をしていくかを読み取らなければいけない。今はいいことがすこし先はよくないかもしれない。

「団地族」という言葉が生まれた昭和 33 年の 3 年前に住宅公団ができた。住宅公団で初めて鉄筋の住宅を提供することになり、今は鉄筋と言っても何も驚かないが、その頃は鉄筋の建物ができたという大変なことであった。しかし、ある人はその時に鉄筋のスラムができてしまうと警告していた。その頃、鉄筋は立派な建物だから、原理的にいうと 120 年もつということになっていたが、今は古い住宅団地はスラム化しているものがたくさんあり、当時の人はそんなことは考えていなかった。その頃は街を美しくしようとするとはとんでもない話であったが、今は街を美しくすることは当たり前の時代である。

これからどのように変化をしていくのか予測のつかないことはたくさんある。経済評論家はいろいろと言うが、そのとおりにしていれば経済評論

家は大金持ちになるはずで、彼らは後追いの説明をしていることが多い。しかし、まちづくりで後追いの説明をするわけにはいかない。というのは、街は一度できたものを簡単に変えられなく、前からやってきたものが今に引き継がれているからである。

横浜の「ベイブリッジ」は数年前にでき、「みなと・みらい」はまだ進行中である。これらは35年前に考えた計画としてまだ進行形で、少なくとも15年ぐらいはかかるだろう。このように半世紀という長時間を要するが、半世紀をかけてできるものはわりあい順調である。30年前に再開発の計画があっても手が見つからないものがあるように、変化するものと変化しないものがあるが、動いていることは事実である。決めたものをそのとおりにやるべきということはなく、将来の読み方が悪いと決めたこともやめた方がいいこともある。しかし、本当に必要だったら何十年かけてもやる必要がある。であるから、「あすに向けたまちづくり」の「あす」を読むのは重要である。しかし、まちづくりは一つ一つが蓄積をしていくわけで、やったものを変えてしまうということは容易にできない。いいものを残し、いいことをやっていき、それが積み上がってくると街全体がよくなっていくという、非常に長い目を持たなければならない。

これからは金もないのに全部変えてしまうことは容易でないので、いい蓄積をどうやって残せば全体としていい街になるかということが課題である。

越谷自体は古い街かもしれないが、市になってから40年というのは、都市として非常に若い都市である。本当にいいものが積み上がり蓄積になってくれば、これはその街としての財産、本当のまちづくりになる。乏しく限られた財源をきちんと使っていかなければいけない。日本だけの問題ではなく、地球上から見て資源やエネルギーも限られているため、本当にいいものを蓄積して自分たちの街をつくっていく時代になる。しかし、一方においてはその時代の変動に短期的に応えるものもあるが、何といたっても長期的な目を持って、積み上げていくことがまちづくりには一番重要な

ことである。ヨーロッパの優れた街に行くと、古いものがちゃんといいところに残っている。才能のある人が1人で優れた建築をしても、それは時代のはやりすたりがあるためおもしろくはない。ヨーロッパの街に行くと様々な時代のものが一緒にあり、それが素晴らしい。全体は大きな時代の流れの中にできていくのである。

## ・これからのまちづくり

もともとあったのは自然の土地や山で、街は初めからなかった。江戸の絵を見ると富士山や筑波山が描いてあり、この当時から愛されていた光景は江戸時代の前から存在した。それを考えると、江戸よりも近いところで筑波山をながめることは、越谷にとっての財産であり、越谷はそういった場所であることを自覚すべきだ。

一方で、利根川は越谷に恩恵と同時に水害をもたらしてきた。越谷は良くも悪くも、そういう利根川でできた土地である。このため、良く言えば水郷地帯、悪く言えば水害の危険があると言われてしまうかもしれないが、利根川が土砂を運んでくればこの平野はない。そして水も供給してくれる。その恩恵の中で生きているのである。利根川が土地をつくり水も供給してくれたので、農業もできる。農業ができることは大変豊かな土地である。江戸時代の東京の山の手は水が出ないので耕作ができない。実際に恵まれている土地はむしろ低い土地、下町であった。江戸時代には高速道路はもちろん、いい道路もほとんどないので、重いものを運ぶときは水運を使った。江戸時代の中心は日本橋で、そこで商業や流通業が盛んになった。下町は水運に恵まれ、物資を運ぶにも具合がいい、商売をするのもいい。それが越谷の方の利根川にさかのぼってきて、物資を運んでいた。そのかわり水が出た場合は浸かりやすいということがあがるが、そこを上手に使うのがまちづくりである。越谷辺りのいろいろな農作物などは大消費地の江戸に運ばれ、江戸も越谷の恩恵に随分浴しており、そういうことが100万人以上いた江戸を支えていた。

その街の良いも悪いも含めていろいろな問題が

あったとしても、その土地からは離れられない。一つの地域の中でだんだんとこの土地が街によさそうだと、そこで人間が集落をつくり、村をつくる、そして次第に街や都市になるという過程をとる。最初に住み出した理由は、災害はあっても、住むにいい街だったからで、そういう場所を選んで育ててきたものが土地である。

越谷市は40年前にいきなり街ができたわけではなく、その前から街ができ、越谷という名前がついたが、今日まで進んできたのはやはり土地があるからである。土地のことをよく知らなければいけない。梅雨があるからいやだと言うが、梅雨がなければ日本の稲作農業は成立しなかった。梅雨が日本列島に大きな恩恵を及ぼしていることは事実で、もし空梅雨で米がとれなかったら日本が成り立たないという時期はたくさんあった。時代をかけて街は蓄積するが、一番基盤にあるのは自分たちの風土なので、あすを知るためには基本的な風土を知らなければいけない。

そして、その上に歴史が築かれてゆく。どのような歴史が築かれてきたか、それはその風土を利用して、そしてその中でどういった生きざまをその人たちがやってきたかという住民たちの歴史があるわけである。そこには悩みや苦しみ、楽しみも喜びもある。そういうものをきちんと知っておくことが次に重要である。歴史的に特に有名でなくても、どのような暮らし方をしてきたのかがその場合の歴史である。それが記憶の中に蓄積されることが重要である。我々はみな記憶を持っており、そういう記憶をどこか頼りにしながら生きているところがある。都市も同様で、もし記憶がない人間がいたら記憶喪失症という病気であるが、都市の場合でももし記憶がなければ半分病気である。その記憶を基にし、あるものは大切にしながら蓄積して、その上に街を築いていくことがこれからのまちづくりである。

未来のことを考える場合は、過去を振り返ってみる。未来を読めなくても、過去は調べるとわかってくる。越谷市の40年間のことをたどることはできても、40年先の2038年にどうなっているか、はっきり予測できる人はいない。でも、それに向けてまちづくりをしていかなければいけな

い。わからなくてもそういう方向に動いて、今から必要なことをやらなければならない。自分の息子や孫あるいはひ孫が、考え方を受け継いでやってくればいいわけで、もちろんその時代によって変えるところは変え、基本的にはこういう考え方でやってきたということが次々と伝達をされていく、そこがまちづくりの楽しいところである。

こういう自分たちの風土や歴史、その中に何らかの誇り、自分たちはこんな街に住んでいたんだなど、辛いことも含めてそこに誇りが生まれる。誇りが生まれないとまちづくりは始まらず、未来の街は築けない。今までやらなかったことがわかってきて、なかなかいいなと思うようになる。あるいは自分の力が少しでも加わって街が少しでもよくなると、余計に愛情も誇りも出てくるだろう。そういうものを繰り返すことで、街は形成されていく。そういう人たちがどのくらいその街に住んでいるか、またどれだけのことをしていくか、これらが累積である。

越谷は急に発展をしたため、物づくりに追われていたけれども、それが本当に将来に対して残っていく物、誇りになる物、そして自分たちがそこに愛情を持てる物、こういう物をこれからどれだけ蓄積していけるか、ということがあすに向けたまちづくりの鍵になるだろう。そういう意味ではまちづくりは物語であって、古い物を生かし、新しい物も加わり、そしてそれらが我々の生活の中にどのように絡まっていくかというストーリーを描いていくことであろう。

それでは今までのまちづくりを少し反省してみると、昔は物があることだけでも価値があった。ところが、街で物を使うのは市民で、道路、広場、公営施設、ホールなどを使う立場から考えてみると街というのはおかしいということになった。我々はこういう生活をするのだから、こういう道路が必要だ。あるいは、道路があるけれども車がうるさいから車を通さないで人間の通りにしよう、というようなことが出てくる。

住むという視点から問題をとらえ直してわかることは、当たり前のこととあまり当たり前ではなかったということである。

しかし、日本も遅ればせながら住まいを考える

という動きになった。そうすると生活の側から街を考えるとことになるが、昔の日本人がそういうことを考えなかったわけではない。大正年間に大阪市長をしていた関さんという方は「住み心地よき都市をつくるんだ」と大正年間に言っていた。今は「住み心地よき都市」は当たり前のことであるが、当時のまちづくりは街路、建物、鉄道をつくるという物づくりになってしまい、何のためにやっているのかよくわからなかった。確かに必要であったが、住むための人にやっているという意識は余りなく、本来の都市の目的を見失っていた。

でもこの関さんは、戦前から「まず、住み心地よき都市」、都市とは何のためにあるかを言っていた。この市長は地下鉄、市バス、市電を公営化し、その時代には収益を上げた。そこから得たお金で、下水道などのもうからないところにつき込み整備をした。何のためかという、「住み心地よき都市」のためである。

このようにただの物づくりではなく、住むということ、あるいは生活ということを中心に街を考えなければいけないということで、高度成長期になるといろいろな問題が出てきた。公害、車、廃棄物など様々な問題が出てくると、せつかく街が発展して立派になっても、かえって住み心地が悪くなり、生活するところから考え直さなければいけなくなっていた。一方においては、とにかくつくればいいんだという考えもあった。少々のお金をもらっても、輸出をするためにみなぜん息になっておかしくなってしまうたら意味がない。そういうところから環境という問題が言われるようになった。

もちろん道路や建物をつくる計画も必要であるが、ただ道路や建物をつくるのではなくて、街全体の環境がどうやったらよりよくなるかを考えなければならない。環境は自然の気や水や緑もあるが、それだけではなくて我々のつくるものも1つの環境である。人工的な環境をいろいろとつくっていくとどこかで自然を壊してしまう。例えば人間が住めないような空気にしてしまったりはよくない。今は環境という言葉は、水とか大気とか、緑とかいうことだけに限定して言う人が多いが、建物も道路も、街全体を一つの人間の環境という

ふうを考え、人間が生活をする環境をどうやってよりよくするか、こういうことも含んでいるのである。

人間は自分たちで自分たちの環境をつくるため、自分たちで環境をつくることも壊すことできる。ハチやアリが巣をつくったりして自分たちの環境をつくっているのは、本能だけであるが、人間の場合は、自分たちの意志で環境をつくることのできる唯一の生物である。そのため、物だけではなく、物が環境にどういうふうな影響を及ぼしていくか、環境全体としてよりよくなったかどうか、を考えるのが環境開発の考え方である。

そういう環境の中でも、空気や水が安全なものでなければ困る。だんだんその中でいい生活をするようになると、アメニティへの要望が生まれてきた。アメニティという言葉はイギリス人に言わせると、安全とか衛生であるとか、そういうふうなもの他に人間らしく生きるために必要なものがアメニティであるらしい。イギリスのアメニティの本を読むと、アメニティはイギリス人にわかっているけれど、はっきり説明しがたい言葉だと言っている。人間にとっての心地よさを「快適性」と日本語では訳すが、要するに人間にとっての気持ちよさ、心地よさ、もっと言えば、平仮名で書くようなゆたかさ、人間の気持ちにゆたかな感じを与えてくれるもの全体がアメニティではないか。国民生活白書で福井県がよくて埼玉が悪いとかという数字が出たが、ゆたかさははっきり数字では出ない。ゆたかだと感ずるか感じないか、これが肝心なところである。今までは抽象的なところに価値など置けず、道路や建物をつくり、中身はどうでもいいから量をつくった。もう少し生活から考えるということになると今度は質を考えなければいけない。人間にとって素晴らしい環境である都市、それが質であり、質的にいいということは、人間が住みやすい環境であるということである。

20数年前であるが、OECDが日本を調べに来たことがあり、環境に対して警告した。30年ぐらい前は水俣病、イタイイタイ病、四日市喘息とか、公害がたくさんあり、訴訟にもなった。公害の問題は相当程度解決したが、アメニティが不十



分でもっと気持ちよく住めるという部分が抜けているのではないか、これからの日本はそういうことで頑張るべきだ、とOECDからレポートが出た。日本はその後随分よくなり、アメニティの問題、人間の住み心地のよさということが問題になるようになった。あすに向けたまちづくりの中では、ただ物をつくるのではなく、人間の生活、そして人間にとって気持ちのよさ、心地よさ、ゆたかさ、真のゆたかさが必要であるという時代にますますなっていくだろう。

私は、住み心地よき都市、あるいは住むにいい都市だけではなくて、「住むに値する街」をつくるべきだと考える。この街に住んでいてよかった、住むだけの値打ちがあるな、そういう街にすべきではないかと思っている。住むに値するためにはどうするかというと、人から全部与えられたものの中で住んでいるのではなく、住むに値する条件をつくるために自分も何かしらのことをやるのが住むに値する街だろう。物でもそうで、せっかくいい物ができたけれども、後の使い方や、管理が悪い、使う人がこんなものができてと言ったら、金をかけた物だっていい物にはならない。住んでいる人が、もっとここをいいものにしよう、よりいい使い方をしよう、そういうことにならないといい街はできない。

まちづくりだけではなく、「まちづかい」が必要ではないか。つまりどうやってそこを使っていくか、どうやって管理し運営していくか、日常的なものも全部含めた、いわゆるソフトも含めたものが平仮名の「まちづくり」で、「まちづかい」はまちづくりの中の一つの分野である。こういう住むに値する街をつくっていくことがこれから大きな課題になる。そのためには、市民たちも自分たちも努力をしていき、それが累積されてくる、そういう街ではないかと考える。

アメニティは、自然に与えられてつくられるわけではなく、自分たちもその中で本当に必要だと思ひ、それに対して努力をしてこそ生じる。この頃日本の街でもいろいろなところに花を植えたり、みんなの努力できれいに行われるようになった。それは決して税金のお金できれいに行っているわけではない。統一性があるわけではない

が、きれいにみんながやっている結果、その通り全体が素晴らしくきれいになっている。もし、税金をかけてやれば、街路にするだけでも金も時間もかかり、今度は職員を雇って一生懸命きれいにしなければならない。一見したところはきれいになるが、やはり何かよそごとである。大通りはそれでいいにしても、管理に金がかかる。みんながそれぞれ楽しんでこそ結果としてやったものは、金をかけずにきれいになり、そういうものがまさにアメニティであるし、住むに値する街をつくっているのである。

バブル経済末期の頃、一人当たりの国民所得を見ると、日本はイギリスの約倍であった。ところが、倍という感じではなく、私が見るところ、向こうの方がはるかに豊かなものがたくさんあった。

ハイゲート・ウッズを歩いたときに、小さな水飲み場があった。約100年ぐらい前のコールリッジという詩人の詩が小さく書いてあり、それには「ここへ来た人たち、どうぞこの水をお飲みなさい。そしてここで静かに耳を澄ませると、ハチがブンブンいたり、風の音も聞こえるでしょう。どうぞそういう声を聞きなさい」と、これはコールリッジの詩であるけれども、この森を愛する人たちより、というのがその水飲み場の寄付者である。今は残念ながらこの森は広くても、車があるから耳を澄ませると車の音がする。けれども、雰囲気はとても静かな森である。例えば、ベンチが寄付してあり、みんな形の決まったがっしりした木のベンチで、背中のところ小さく「この森を愛した何々より寄付する」とか、「この森を愛した何とかの息子たちからの寄付」とか、いろいろと書いてある。そういうところに座って周りの森を見ると、なかなかすばらしい。そういう蓄積の力は、ちょっとかなわないと感じてしまう。

このように、あすに向けたまちなかでは、本当の豊かさをつくらなければならない。とにかく忙しく走り回り、数字がイギリス以上になったとかドイツ以上になったとか言っているけれども、本当はもっと豊かになる方法があったのではないのかと思うわけである。これからの日本はそういうことを模索すべきところだし、東京の周辺にできた住宅を中心にする都市はまさにそういうふうなア

メニティに溢れる都市をつくり、これから21世紀の間らしく住む住み方を考えてみるところと思う。もちろん、そのためには健康、医療、福祉、廃棄物、子供、教育などの様々な問題があるが、そういうものも心地よく住むために、どういうふうにしていくかということが重要である。

外国語には「バリアフリー」という言葉があるが、でこぼこがあって歩きにくい道に車いすでは行かれない。そこを自由に行けるようにしようじゃないかということで、日本でも急速に「福祉の都市づくり」や「福祉のまちづくり条例」をつくったりする街も現れてきた。しかし、日本はベースができていないので非常に歩きにくい。ニュージーランドで家内が骨折ってしまい、その車いすを押したとき車いすを押すというのはいかに大変なものかということがわかった。ニュージーランドはそういう配慮がよくされている方だが、日本ではとてもできないと感じたものである。もちろん日本でもいろいろやっているけれども、他人がやるからやっているんだというような感じがしないでもない。やはり、人間の住む本当の街、何も身体障害者とかの問題だけではなくて、人間の住める街、見て目で美しい街、気持ちのいい街、そしてすがすがしい街、誰でもゆったりとした安全に暮らせる街、そういうためにはいろいろな仕組みが必要である。そのためにはもちろんそれを支えるような仕掛けも必要で、そういうものを本当にこれからどうやってつくっていくかが問題だろう。

イギリスでは、産業革命で無茶苦茶な街をつくってしまった。1950年になっても、ロンドンで3000人がスモッグで死に、20世紀の半ばになってやっと家庭から出る煤煙をやめさせ、煙突もやめさせた。それでロンドンの霧も少なくなり、大変きれいな街になってきた。イザベラ・バードという有名なイギリスの婦人が、明治10年ぐらいに日本を旅行して、日本の街はすごくきれいだと書いていた。どこの街も本当に塵ひとつ落ちていない。農家はちょっと貧しいけれども、ちょっとした街に入ってみると道なんかは本当に掃き清められて、ちり箱一つも置いていない。ゴミが1つでも落ちると誰かが持って行ってなくしてしま

う。こんなにきれいなところを私の泥靴で歩いていいのだろうか、イザベラ・バードさんは書いていた。もちろん舗装道路やれんがタイルはなく、普通の泥道で、いかにそれだけきれいに使っているかということである。イギリスは、明治10年の頃は産業革命のビクトリア朝の一番発展したときで、外に対してはそれこそ世界一の国だったけれども、中は無茶苦茶であったのである。日本も高度成長期のときはかなり無茶な街をつくってしまったので、イギリスができたように豊かな街にすることはできるはずである。

街というのは一体誰がつくるのか。江戸の都市づくりをした徳川家康は当時としてはなかなか素晴らしい都市づくりをしていることは事実であるが、基本的にはお上がつくっている。街というのは金がかかるので役所がやり、市民は後から住めばよいという時代があった。

しかし、現代民主主義の中で、街を役所だけでつくっていていいのだろうかと考えられ始めた。物づくりだけだったら役所だけでもできるかもしれないが、これからは生活から街をつくっていくかなければいけない。そしてそこに住むに値する街をつくろうとすると、市民がこういうまちをつくりたい、孫子の代まで住めるような誇りのあるような街にしたい、ということに関心を持ち、そして自分たちのできることをやろうという精神にならなければいけない。自分たちが自分たちの街について関心を持って住みよい街にしていく、今はこういう時代である。

そのためには、まちづくりをするための仕組みやルールが必要である。横浜市のとある小さな街の一画に集まった人達は、自分たちでまちづくり憲章をつくった。法律的には協定であるが、それは物の問題だけではなく、ごみの出し方や生活の仕方などをみんなで決めた。要するに、自分たちが自分たちの街をどうしたいかであって、この街の一画だけこんなふうにしたい、花でもきれいに植えようじゃないか、あるいはごみは変なところに出さないようにしようじゃないかというように、行政の方からこれでやりなさいというのではなくて、生活者の方から決めていかなければいけないのである。

これからのまちづくりは、生活者が主体であり、自分たちが自分たちのルールや仕組みをこしらえていく。もちろん自然体としての仕組みやルールも必要である。そうすると、街は仕組みやルールづくりをやるのかということそんなことはない。まちづくりは人づくりという言い方をするが、まちづくりをやる中で人間が育ってくる。街というのは市民一人一人が芸術家になった共同作品である。古い歴史の物も残っているかもしれない、自然もあるだろう、その中で自分たちがこれから積み上げていくものである。中世のヨーロッパの都市は、自分たちで都市法をつくっていた。その人たちが1年に一度広場に集まってくる。ヨーロッパの街の真ん中の広場で自分たちでつくったルールを守ると宣誓をすることが市民の条件であった。自分たちでやっているという感じを持ってないと、本当の愛情とか誇りは持てない。

これからの街は、人間的な街、人間が住める街、住むに値する街、しかし、それをつくっていくのはやはり住んでいる方々が共同してどうやってつくっていくか、そのためには自治体がその中でやるべきことをもちろんやり、自分たちがどういうふうな気持ちを持つか、ということが基本にあり、そして他のいろいろなところで協力しあうことが必要になるだろう。

## ・ 質疑応答

### 質問 1

何回か「人間にとって快適な環境」という言葉がありましたが、日本ではこの環境というものを壊しながら人間の快適なまちづくりをしているような気がいたします。また、人間にとって快適な生活はどこかで我慢をしていかないと、本当の意味でのまちづくりはできないと思っております。田村先生は我慢という部分でどのように考えているのでしょうか。

### 返答 1

大変本質的なご質問ですが、先ほど私が環境と言いましたのは、もちろんそこにある自然、水、緑、空気、その他にそこに住んでいる生物たちも

当然に入っているわけです。様々なそういう生態的な環境の中に人間が住んでいる。そういうところを余り侵し過ぎてはいけないだろうというご意見だろうと思います。

次元が違ってしまって恐縮ですが、22世紀はブラックの時代になるのではないかと考えているんです。この前、西アフリカを見てまいりました。そのときに冷房がほとんどなくて、あってもすぐに電気がなくなってしまう。その次にサウジアラビアに行きました。同じような暑いところでもものすごく快適なんですね。アメリカ以上にすべてが快適なんです。サウジアラビアみたいなことがいつまで続くかということ、それはせいぜい50年ぐらいでしょう。永久に未来永劫にできるということはないんですね。我々がアフリカの生活ができるかということ、今の日本人はできないんじゃないですかね。白人もできなくなっている。快適な中におぼれてしまったからできなくなっていると思います。

でも、サウジアラビアの中でも1つ違うのは、メッカと共存していることではないかと思うんです。メッカというのは、ご承知のとおりにお祈りをするところです。イスラム教徒でない限り外国人は入れません。この国は徹底したイスラムをやっているわけですね。片やものすごく快適にやる、片やその抑えとしてそれこそ徹底的に我慢する。例えば、ラマダンという断食を1カ月します。宗教の中で何とかぜいたくな生活を抑えているわけですね。西アフリカは、本当に貧しいです。しかし、ものすごい生活力と生命力がありますね。それでは日本はどうなのか。日本はアメリカ的になってしまって、我慢という仕組みもない。サウジアラビアは我慢の仕組みを持ちながら、快適なところもあって、100パーセントおぼれていませんね。日本は100パーセントおぼれてしまう方に行っているから、駄目になるのが早く、それは考えなければいけないんじゃないかなと思っています。

次元の違う話をしましたが、22世紀を生き延びていくのは、全体の文明として白人世界が非常に快適生活の中に慣れ過ぎてしまいましたから、全然違う次元になりそうだなと思っています。そ

れでは日本は、どうするのかということを考えてみないといけないと思います。

私個人も快適に慣れてしまって、同じ気象条件でもサウジアラビアに行くと実に快適で、西アフリカに行ったら、私は海外旅行でこんなにくたびれたことはありませんでした。人間は快適な方がいいに決まっているんですね。先ほども申し上げましたが、緑の木が1本植わっているのでも、700キロ先から石油で海水を淡水にして緑をつくっている。緑がある方が快適です。でも、緑がいつまでもつかは誰も保障していませんね。快適だからいいというのではなくて、トータルな環境を考えるとというのは、たった今のいい環境ではなくて、50年後に全部なくなってしまうのは、人間にとっても必ずしもよくないんで、本当によく考えるのであれば、もう少し別な次元をトータルに考えなければいけない。今の空間だけではなくて時間の次元でも考えると、我慢しなければいけない、どこかでやめなければいけない、ということを実際に考える。それが本当に快適な環境をつくることだろうと思います。

## 質問2

「あすに向けたまちづくり」は、はじめにある物で満足し、次にある物を有効に使用しその上で「あすに向けたまちづくり」をしたらいいんじゃないでしょうか。例えば、金のかからない「チャリティー 親子漫才」、「チャリティー 親子カラオケ大会」、または「パレード通り」をつくるなど。

## 返答2

次のパネルディスカッションで出るのではないのでしょうか。

## 質問3

横浜市で行政に携われ、横の調整にどのような苦労談があったのでしょうか。

## 返答3

この話しをしますと延々と長くなってしまいますので、私の書いた本を読んでいただくのが一番

早いんです。私は一番最初は国の中央官庁に入り、世の中は縦割りになっていることもよくわかっております。それから民間の会社にもおりましたが、全くバラバラなんですね。そのバラバラのものを動員してうまい力にするか、マイナスでないようにするか、私が最大にやったのはその問題なんです。それしかいい街は本当はできないんです。バラバラにやっていると部分的にいいことをやってもお互い同士が消し合ってしまうまして、妙なことになるかねない。中公新書から出ています「都市ヨコハマをつくる」、あるいは「都市ヨコハマ物語」という時事通信社の本もございますので、是非ご興味があれば読んでいただきたいと思えます。

例えば、美しいということを申し上げましたが、美しいということはトータルな価値なんですね。美しくことを実現するにはどうするか、美術家や芸術家がやれば美しいかということ、都市環境は全体ですからそうはならないんです。そうすると、あらゆるところにおつからなければならない。それを一つ一つどこかで解決していくということになるんです。

## 質問4

2点あります。1点は、田村先生が越谷駅から歩いてきた過程で、実際に歩いて街を見て、先生はどのようなことを感じたのでしょうか。

2点目は、市民参加と一般的に言われておりますけれども、市民としてどういう形で参画していくことができるか、具体的な参画の仕方やお互いの組み合わせ方などはどうしたらいいのでしょうか。

## 返答4

恐らくそういうことも含めてパネルディスカッションが行われると期待をしております。

駅を降りてからは車に乗って来たので、ゆっくり見ていないんですが、駅前のところに変な大きな木が植わっており、駅前に木があるのは感じ悪くないなと思いました。それから、ここに来まして、この建物の2階の喫茶室に行ったんですけれども、目線の辺りにアヤメがあって、あのぐらい

の目線のところに水辺があるのはすごくいいなと思っています。

2番目の市民参加云々というのは、私どもは長い間実践をしてみたり、理屈を言ってみたりさんざんやっています。どういう方法がいいかは一概に言えないんですが、やはり基本的には自治という問題なんですね。現在、我々が使っている日本国憲法の中に地方自治とわざわざ一章入っているんです。これが今の憲法の中にわざわざ入っているというのは、ひとつの特色です。ただし、実際はそうはなっていなかった。

でも、いろいろなやり方があると思います。役所に関係なくやっているのがありますし、役所と関わりながらやっているのがあります。最近NPO法が成立したり、様々な形があるので一概に

は言えませんが、そういう多様性が市民活動の一つだと思います。ただし、中央官庁はともかくとして、自治体はお上ではありません。憲法に書いてあるとおりに、市民がつくっている市民政府だと私は思っております。その市民政府を市民政府にするというのは、自治の問題として選挙とかいろんな形で自分たちのものによりよく近づけるということは政治的にもありますし、そうじゃないところでも日常的な形でいろいろあるのではないかなと思います。

明治以来からの自治はどういうふうに使われてきたかということが未だに残っていますが、建前上ははっきり変わっている。それを変えるチャンスは様々な機会にあるのではないかなというふうに思います。

# パネルディスカッション

## 市制40周年記念

## まちづくりフォーラム

テーマ「あすに向けたまちづくり」

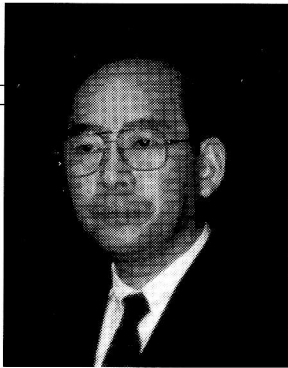
### パネラー

岸 井 隆 幸	日本大学工学部教授
野 島 正 也	文教大学人間科学部教授
山 田 知 子	放送大学教養学部助教授
澁 谷 俊 雄	越谷市自然ウォッチング指導員連絡協議会会長
青 木 玲 子	越谷市男女共生のまちづくり推進市民会議専門委員

### コーディネーター

松 岡 宏 (株)地域総合計画研究所取締役





松岡 宏氏

○松岡 それでは第2部のパネルディスカッションに入りたいと思います。

最初に先生方からいろいろと問題提起をしていただきたいと思います。申しわけございませんが、1人10分程度でお願いしたいと思います。

それでは、岸井先生からお願いいたします。



岸井 隆幸氏

○岸井 今回「あすに向けたまちづくり」ということで、市が次の総合振興計画をおつくりになる時期、そのスタートに当たってどういう議論をしようかということが今日の話題であろうと思いますので、私なりに最近感じておりますことをお話をし問題提起とさせていただきます。

1つは、社会の大きな枠組みについてどういうふうに変わりつつあり、越谷はどういうふうな状況を受けているのかという認識であります。越谷市は、人口5万人弱で市制をしいて今は30万人と、急速に人口が増加をしてきた。これは当然越谷市の理由というよりは、首都圏全体の人口圧力によって越谷市も成長を遂げてきたということであろうと思います。では、東京圏はこれからどうなるのだろうか。越谷市はその中でどういうふうな位置にあるのかについて考えるべきであろうかと思ひます。

現在、国の方では五全総といひましようか、全

国総合開発計画の第5次ですね。それを受けまして、新しい首都圏整備計画づくりが進められております。恐らく今年一杯、あるいは今年度一杯で何らかの方向が出ると思われます。その際に、議論をしております社会の状況としましては、1つはいずれ首都圏の人口圧力も衰えてくる、あるいは首都圏の人口もピークを迎える時期がくるということでございます。これまでは、我々は大変多くの方たちが東京におこしになる、あるいは東京で新しい住宅を求められる。これをいかに制御するか、いかにそのために受け皿を用意するかということに必死に努力をしてきた時代であったと私は思っております。昭和30年代の高度成長以来、数多くの方が東京、あるいは大阪におこしになりまして新しくお住まいを求められる。それに対して道路、公園、下水道を初めとする生活の基盤となるべき施設をどのようにして提供するか、これが大変大きな課題だったわけでございます。それが人口圧力が減ってくるということは、やや一面寂しいような気もしますが、実はいよいよ本格的にまちづくりに取り組める時期を迎えると私は考えております。これまでは、圧力に対して受け皿を用意するということが大変大きな課題だったわけですが、いよいよ本格的にまちづくりに取り組める時期を迎えつつあるのではないかとこの認識でございます。

そういうふうな越谷を見た場合には、東京に働きに行くために住まいをここに求めるという段階から、越谷を生活の拠点として、越谷市のポジションを十分に活用して楽しい生活を送ることが当然と求められてくるだろうと思ひます。我々の目はどうしても東武線をたどって東京の方へ向かうわけでございますが、よく見ますと、実は東の方にまゐりますと野田市とか、常磐新線が出てまゐりますと柏に東大が移転をいたしますので、その関連で柏市が成長するだろうと思ひます。さらには西の方へまゐりまして、今工事が進んでおります大宮の新都市拠点、いろいろな政府系のものが入ってくる。横方向のつながりがかなり見えてくるわけでありまひます。いろいろな可能性を我々に提供してくれるという意味では、楽しい生活が待っているという気もいたします。

ただし、それがどこへ行っても同じである必要はないし、そうであることはかえってあんまりおもしろくない。むしろそれぞれの街が自分たちの個性を持って連携をし合う、そういう計画づくりが求められている時期なのではないかという認識を持っています。個々の地域がそれぞれの独自の個性を持ちつつ、いかにして連携を図るか。地方分権というのは、自分たちが責任を持つと同時に、自分たちで話し合いをして、広域的な問題も処理していけるようにならなければ本物ではない、個性と連携が計画に必要だろうと考えております。

2点目は、そう言いながら実は個人個人についてはバラバラであります。決して悪いことではありません。個人個人の価値観がそれぞれ自分の独自のものである、ということがだんだんはっきりしつつある。しかし、実はそうは言いながらも社会に大きくトレンドはある。例えば、車の問題です。今日本では千人当たり500台ぐらいの車があります。アメリカでは750台、ヨーロッパも500台前後あります。1960年には日本で千人当たり15台ぐらいしかありませんでした。猛烈に伸びております。この車のもたらす便益と負の側面は、これはいやでも我々に迫ってくるものであります。さらには高齢問題があります。これも必ずやってくるわけであります。要介護のご高齢者に対して何人の方がそのサポートができるか。今は大都市圏では少し楽であります、いずれは地方部と同じように20～30人で1人をサポートする時代がやってくるであろうと言われております。こういった大きなトレンドというのは、やはり我々の中では対応していくことを考えなければいけない。その中で自由な価値観を具現化できるような空間、仕掛けが必要なんではないかという気がいたします。

具体的に申し上げますと、越谷市が従来からやってこられていますコンパクトなまちづくり、これは私は非常に重要なことだと考えております。30万人いらっしゃいますが、実は駅でいいますと5万人の街が6つつながっているという状態に等しいような形状でございます。それは少し郊外に出ますと農地が広がり、自然が残っている。こういうふうなコンパクトなまちづくりは、やはり

これからも必要であろうと思います。それに加えて、さらにいろいろな方たちが自分たちの価値観を具現できるためには、その方たちの知恵と工夫が交流できるような空間を都市部に用意する。これも恐らく今後の課題であろうと考えております。

最後に3つ目でございますけれども、先ほどのご講演でも繰り返しご説明がありましたが、街をつくるのは時間がかかるということであります。従って、逆に言いますと、計画づくりも大変大きな可能性を持っているんだということです。今、来年のことをプランしようと思うとこれはかなり限定がありますが、22世紀だというふうになれば100年間もあります。そんなの何の意味があるんだと、こういう話があるかも知れませんが、先ほどロンドンの例もありましたけれども、日本でも事例が挙げられます。

例えば、皆さんがこの街はきれいだなと思われ、よく話題になる街として神戸がございますが、神戸の山と海、昔から神戸はああいうふうなところだったからいいなと思いかもわかりませんが、あの山の緑は100年前に我々の先輩が植林をしたものです。そもそも花崗岩質のはげ山でございますから、そこに木を植えて100年間経てばあいう山になるわけです。また、横浜の都心部も実は、関東大震災の後の震災復興を基礎にして形成されております。大変な遺産でございます。さらには、東北の方では杜の都仙台、これもなかなかいいイメージを持っておりますが、あの仙台のケヤキ並木は、伊達藩からのものではございません。戦争の後の震災復興土地区画整理事業で全く新しく道を開き植えたものでございます。50年経てば街のイメージを大きく変えるような空間ができ上がるわけであります。是非、計画づくりには骨太な考え方を入れていただきたいと思っております。越谷市は新しい街であります。30分の5が歴史の街、30分の25は新しくお住まいになった街であります。その街が22世紀に向かって、やはり越谷はこういう街だということを言えるようにこれから準備をすれば、次の世代には越谷市にも大変美しい、あるいは大変力強いイメージができ上がるのではないかと考えております。

○松岡 どうもありがとうございました。それで



は、野島先生お願いいたします。



野島 正也氏

○野島 文教大学に勤めて20年ちょっとになります野島でございます。文教大学は元荒川沿いがありますが、大変落ち着いたところで、桜がいいんですけれども、私は菜の花の時期が一番好きです。学生は、都会的なところがないと言って物足りなさそうですが、送り出す父母からみますと、あんな安全でいいところはないそうです。

私は社会学が専門でして、いろいろなことを調査し、分析して学生に伝えるということをやってきました。特に、地域サークル活動ですとか、あるいは市民活動に関心を持って、その領域でいろいろとインタビューをさせていただいたり、アンケート調査をさせていただいています。公民館の学級などにも年に何度か伺っています。

そこで感じることは、公民館の活動とか、あるいは地域ボランティア活動ですとか、そうしたところでの活動が非常に活発になっているということです。卑近な例で恐縮ですが、例えば私の配偶者は、音楽のサークルに入っています。非常に熱心でして、週に2回ぐらい公民館に行くんです。夕方になるとさっと出かけるんですね。前は食事の支度をしていたんですけれども、今は全くやらないで、息子と2人で今日どうしようかなってやっています。

文化活動とかボランティア活動とか熱心にやっ  
ていらっしゃる方は多いと思います。その流れの中で感じますのは、家庭ですとか、あるいは仕事以外の活動を片手間の活動としないで、非常に熱心に関わっていく、そういうライフスタイルがだんだんと定着してきているのではないのかなと思うんです。よく余暇という言葉がありますけれども、余った暇ではなくて、まさにそこにきちっと

足をつけて、仕事あるいは家庭と共にその活動を大切にしていって、という考え方だと思うんです。これを私なりに、「二足のわらじ」という言葉で考えました。余りいい言葉ではないかもしれませんが、とりあえずそういうことで紹介したいと思います。

1足は、家庭、あるいはご近所との関係、あるいは仕事。もう1足は、地域の活動だと思います。2足目は家の中での様々な活動とは全く違って、自由にいろいろと選べる。また、仕事の関係ですと上下の人間関係が非常に多いんですけど、地域の中では、いわば横のつながりの中で関わっていけるわけですね。2足目の領域が広がってきた一つのきっかけというのは、自分が外に出たいという気持ちもありますけれども、外のいろいろな団体、グループ、サークルなどがだんだん多くなってきて、自分が関わりたいと思うようなグループが近所の中で目につくようになったということがあると思うんです。誘いをもらうとか、あるいは広報などでそうした情報を得て、そこに関わっていくということができやすくなってきたんだらうと思います。これからのまちづくりを考えていったときには、一つは従来の家庭、仕事、家事、そういうところに足をついた形での活動と、これから増えていくであろう市民活動があり、市民として今までの足場とは違ったところでもう一つきちっと活動の場を持っている。そういう形が街の中で定着していくんだらうと思っています。そのためには、まず地域のグループが自立していろいろなことをやっていくことが非常に大事だと思います。多くの市民はそういう気持ちはあるけれども、グループのマネジメントまで含めてでるきようには必ずしもなっていない。この当たりがこれから10年、あるいは15年ぐらいの一つの課題になっていくのではなかろうかと思っています。

家から出る、あるいは仕事中心の生活から市民活動を求めて出ていったときに感じますのは、不安だと思うんです。地域に出ていったときに必ずしもいいことばかりではなくて、世の中にはいろいろな人たちがいますので、いやな思いの1つや2つ必ず体験するわけです。そういうことを体験していかないとその次のステップにはなかなかい

けないということがあるんじゃないでしょうか。例えば、子供が小さいときによくあることですけれども、外で遊んですり傷をつくって帰ってきます。これは日常茶飯事なわけです。それと同じように、私たちの生活でも人は外に出なければ傷つかない。出れば何らかの形で傷つくこともある。だけど、それは十の活動をやったうちの一かもしれません。後の九はよかった。悪ければ、六はよくって、四は大変辛いということはあるかもしれません。人はそういう中で、人間関係の中でのちょっとしたすり傷の処理の仕方を学んでいくんだと思うんです。まだまだそうした外に出るという体験が生活の中で大きな割合を占めていませんので、すり傷そのものをつけることを怖がっているところがあると思うんです。私たちは子供と同じように、進んでそういうすり傷をつくるような場にも出かけていった方がいいだろうと思っています。そして、そうした多少の人間関係の行き違いを処理し、そうした処理能力をつくっていくことで新たな人間関係を築いていくことができるんだと思っています。

私は、まちづくりの中で特に今足りないのは、人と人との関わり方の文化だと思っています。文化と言ったときに、例えば、越谷にはたくさん立派な建物があります。すごいな、いいなと思うのですが、それとは対照的に人と人との関わり方というものはなかなか外に見えないんです。そこに住んでいる人にはわかるものですね。これから関わり方の文化というものをどのようにつくっていくことができるのか、それは一言で言えば参画とか参加ということになると思いますけれども、まず外に出かけて行って、自分で体験しながら、すり傷を少しつくりながらでも新しい活動の足場をつくっていく、そして今度その足場の作り方を人に伝えていく、誘っていくという、そういう段階がまさに今日の姿だろうと思っています。

これから5年の間にいろんな建物ができるかもしれません。今まででもできてきました。その建物がつくられていくよりも、私たちのそういう関わり方の文化がつくられていく方が時間的には遅いんですね。こういうのをタイムラグと呼んでいます。それは必ずあるんですね。しかし、着実に

やっていけばそうした文化はできてくると思います。

例えば、他の街からこちらに住み替えた人が、やっぱりここに来てよかったと思えるのは、建物もありますけれども、もう一つはそこでの人間関係であったり、誘ってくれる人であったり、またはそこでいろんな活動ができる場であったり、団体、組織であったりだと私は思っております。

時間のことが気になりますが、今日は「二足のわらじ」ということを申し上げました。一足は確実にあるんですけども、もう一足分、きちっと私たちが足を出せるような場をこれからの10年、20年の間に育てていく必要があるのではないかと思います。

○松岡 どうもありがとうございました。それでは、山田先生お願いいたします。



山田 知子氏

○山田 放送大学の山田です。埼玉県で新たに保健福祉、医療系の大学を越谷市につくるということで、その準備のお手伝いをさせていただいております。そういうことでここにいるのだと思っております。私の専門は、社会福祉の政策でございますので、その中でも高齢者の施策を主にやっておりますので、その立場から簡単にお話を申し上げます。

市制40周年ということで、まさに戦後50年、日本が馬車馬のように経済優先で走ってきたその流れと共に越谷があるんだと、先ほど基調講演を伺いながら思ったわけですが、今、社会の中の枠組みというのは、経済とか競争、生産ということだけに価値を置く社会から、田村先生のお話にもありましたけれども、生活優先というところになってきていると思います。いかに自分の住んでいるところを豊かにしていくか、働く環境

をよりよいものにしながら、同時に住まいだとか、子育てとかそういった暮らしのところで豊かさを実感できるように両方を追求していくことが問われていると思います。子供の問題だとか、高齢者の問題とかいろいろありますけれども、人と人の関わりが希薄になっていて、地域のつながりが崩壊しつつあります。新しい地域のつながりをどうつくるかが一方では求められている、ということが今日の社会福祉を考える基盤としてあると思います。それから、先日厚生白書が出ましたけれども、サブタイトルは少子社会を考えるということで、結構読み本としてはおもしろいので、読んでいただくとおもしろいかと思いますが、その中でも少子、高齢、そしてそれに対してどういうふうに福祉の政策をつくっていくか。しかもそれを一般の市民、当事者を合わせた参画というものでどうつくっていくかということがテーマになっていると思います。つまり生活、福祉を基点にしたまちづくりということです。

先ほど労働の話を上申しましたけれども、まちづくりの中で従来は、ずっと地元に住んでいる方とか、日常的に長く生活をしている専業主婦の方などが多くまちづくりをするのに主体で今まできた時代があったと思いますが、やはりこれからは働く人たちも地域に引き込みながらやっていく時代になっていると思いますので、そういう意味では、あらゆる年齢層、性を問わず、まちづくりにどう積極的に関わっていくかということが問われていくと思います。

福祉の中では、特に少子、高齢という問題を機軸に政策が大きく転換をしております。地方分権化、市町村の役割が重視され、そして施設中心だったものが在宅といいますか、地域型の生活支援システムをどうつくるかというところに移ってきております。ただ、財源に限りがあるということがよく言われまして、そういう意味では利用者負担という考え方も大きく導入されて、昨年12月に介護保険というものが導入されたわけです。それを皮切りに社会保障の全体的な構造改革が進んでいるわけです。しかし、日常生活の視点、利用者の生活からみると課題は大きい。越谷の高齢者の中で寝たきりの方が687人で、そのうちの

7割が女性でありまして、一人暮らしの8割は女性なんだそうです。そういう意味では、地域の中でどうそういった方々を支えていくかということが、非常に中心的な課題になっているんだろうと思います。

最近、福祉のまちづくりの中でよく言われていることは、ハードのみならず、赤ちゃんを育てるとか、お年寄りが多くなるという社会の中では、日常生活圏が非常に重要になってくる。つまり、歩ける範囲で日常的ないろんな支えが得られるかどうかということが、非常に重要になってくると言われております。そういうふうにして考えていくと、いろんな自治体などでまちづくりの取り組みがある中で、先駆的なところというのがありますが、そういうところを見ても、自分たちの地域の問題、自分たちの地域にいる寝たきりのお年寄りをどう支援するかということを主体的に問題の解決まではしなくても、問題を共通認識していく、そして議論していく、自分たちができること、あるいは行政にどう伝えていくか、行政の方を呼んでディスカッションをする、行政をパートナーシップといいますか、そういう中でまちづくりを展開しているところがほちほち出てきております。そういう意味では、社会福祉の施設も上からでき上がってくるのではなくて、自分たちが高齢期になったら利用したい、自分の親を利用させたいと思えるような施設をつくり、あるいは自分たちが利用できるようなヘルプサービスの質を確保していくことが必要になってくるわけですから、自分たちの福祉のあり方を日常生活圏を拠点に展開していけるような、そういうものを機軸にしたといいますか、そういう要素を入れたまちづくりの展開がこれからは必要になってくるのではないかと考えております。

そういう意味では、もちろん行政の縦割りなどと言っている時代ではありません、今行政も大きく変わってきています。昔は役所にいた行政の人たちが、今はどんどん地域に出て行って、住民と一緒に地域の問題を解決する一つの資源になってきているところもあります。そういう意味では、行政が何かをしてくれるというのではなくて、むしろもっと我々が自分たちの地域の問題、福祉の

問題を共通認識をして、そしてそれを行政に伝えていき、また行政はそれを受けとめ、できるものは予算化していくと。そういういろんな問題を解決し、議論していく過程で本当の意味で街を愛するとか、街をつくっていかうとか、いろいろな問題はあっても、ずっとここに住み続けようというような意識ができてくるのではないかと考えているわけです。

そういう意味では、住民は福祉のみならず様々な情報を取り込みながら、自ら学習し、そして人と人とのつながりの中で解決方法を模索するということが必要になってくると思います。住民の底力といえますか、これから10年ぐらいのうちに市民の力が試されると思います。そのような状況の中で本当の力を持った自治体がだんだんリードしていくようになっていこうと思います。

福祉からいいますと、今利用している人もそうですし、これから利用するかもしれない人たちは住民の中にたくさんいるわけですし、それから今当事者になっている人、家族も含めてたくさんいるわけですから、当事者参加として、利用者主体の日常生活の問題を基盤にして具体的な計画やまちづくりプランを出していく、ということが非常に重要ではないかと思っております。そういう中で、本当に自分が利用したい施設のあり方とか、サービスの内容が決められていくのではないかと考えております。

○松岡 どうもありがとうございました。それでは、澁谷さんお願いいたします。



澁谷 俊雄氏

○澁谷 先生方は持ち時間をきちんと守って話されました。私は今朝家内から「時間は守るんだよ」と言われてきたんですが、15分の時間が10分に切られましたので、どうしようかと困ってお

ります。

私は、自然が好きだということで自然ウォッチング指導員連絡協議会の会長、それから蒲生愛宕町の住民ということで自治会長の立場、それから田舎が新潟県ということで、越谷新潟県人会顧問をしており、そんなことをからめて越谷の環境の話をしたいと思います。

先月あたりは「目に青葉山ホトトギス初ガツオ」という言葉がありますが、この中には生き物が3つ出てまいりました。植物では、昭和53年に越谷の木としてケヤキ、花は菊としましたが、私はこれでは納得いきません。忘れていたものがあるんです。実は、40のマークの下にKOSHIGAYAとありますが、あれがどうしても草に見えて仕方がないんです。田村先生も水辺のアヤメがきれいだとおっしゃいましたけれども、あの下に見えないものがあるんです。実は「キタミ草」という草が今葛西用水の川底で夏の眠りに入っております。これは日本に現在2カ所しかない草です。九州熊本市周辺に1カ所、語源の北海道の北見市は絶滅してしまっています。シベリアから鳥が運んできたんでしょうか、越谷にはこれがあるのです。それから鳥はシラコバト、これも実は最近減りつつあるそうです。文部省の唱歌に「ポッポッポッハトポッポッ」とありますが、あの「ポッポッポッ」と鳴くのがシラコバトです。それからもう1つは魚です。魚については、初ガツオではなくて、私が住んでいる蒲生愛宕町が綾瀬川に隣接しておりますので、綾瀬川のことを少し取り上げてみたいと思います。

水郷越谷と言われます。たくさん川がありますが、綾瀬川は13年間ワーストワンの記録を持っています。実は、川ぞいの愛宕町としても非常に残念なことがございます。その綾瀬川も最近は水質がよくなってきております。本日持参したこの道具は、水の透視度を調べる道具です。下の方に十文字の印がありまして、水を抜いていきこれが見えたときに透視度何センチと表現いたします。綾瀬橋付近で測ってみますと、大体30センチ前後が透視度です（綾瀬川の水質検査実験）。

岩手県の竜泉洞の地下に水たまりがありますが、あれが45メートルの透視度です。1円玉が放り込

まれていてキラキラキラキラと見えます。もっとも透視度の高いのがシベリヤのバイカル湖で、これが六十数メートルと聞いています。日比谷線に乗っていると、日本エレベーター製造の試験塔が見えますが、あれが大体80メートルですから、上から見て下にある1円玉が見えるわけです。それぐらい水がきれいです。

その他水質検査として、ペーハー（pH）の問題、酸・アルカリの問題、これはまあまあ中性に近くなっています。アンモニアの問題、BODと言いまして、生物酸素要求量、この数字も一昨年の数字で7.4です。この数字は大きいほど悪いです。これが少なくなってくればいいわけです。ワーストナンバーワンになったのは、奈良県と大阪の境にある大和川です。綾瀬川がナンバーツーになりました。お隣の草加市では非常に喜んで、イベントをしようと言っていました。数字はそれほどよくなっていないんです。大和川の方が悪くなったんです。

鳥も9種類綾瀬川のほとりにおります。私は今年の5月に槐戸橋下流でカワセミを見ました。それから、夕方フラフラ歩いている男の人が焼き鳥を持っていましたので、これで約10種類になりますね。

それから植物も9種類。蒲生という土地は、ガマという草からきているんですね。大ガマ、小ガマ、姫ガマ、これがまた川辺に生え出してきました。うれしいことです。

水中生物は18種類。コイなどいろいろおります。去年の12月に大変なことが埼玉新聞、読売新聞、朝日新聞などに載っておりました。釣りをしていた人が魚が白くなって浮いているということで、これは大変だ、青酸カリでも流れているんじゃないかということで、すぐ110番をしたわけです。警察がバケツで汲んでいました。何をしていますか、と聞いても警察ですから何も言いません。そうしたら今度は環境保全課に電話がいったわけです。調べてみたら、青酸ではなくて、水の中の酸素が不足してきて魚が呼吸困難で引っくり返ったということなんです。ある新聞では、5千匹、ある新聞では3万匹、朝日新聞は20万匹と書いてあります。しかも、記事が「越谷市蒲生

愛宕町の綾瀬川」と書いてあるんですね。綾瀬川の蒲生愛宕町付近というんでしたらいいんですがね。

今、愛宕川にコイが200～300匹入ってきます。それは水質浄化のためにつくったところの下流に産卵に上ってきております。この前ある人が釣りをしていました。私も釣ってはいけないと言えないから、「その魚は食べられないと思いますよ、放して行って下さい」と言いましたら、「承知していますよ」と言った。そうしたら隣の南町の人が通りすぎりに、「その魚は水道の水で3カ月飼っておくと、食べられるよ」と言うんです。私の気持ちも知らないでおせっかいな。

去年は、80cm位の色コイを釣って、ゆうゆうと誇らしげにぶら下げて行くのを見まして、腹が立ちました。かわいそうにと思いました。

越谷には環境保全課に関係したこういう環境問題に取り組んでいる団体が70近くあります。そのうち自然関係に取り組んでいるのが14、残りが廃棄物の問題、あるいはリサイクルの問題等に取り組んでいる団体がありまして、非常にありがたいと思いますが、もっともっと増えていった方がいいと思います。

市長さんがあすに向けたまちづくりで、住んでよかった、暮らしてよかったまちとおっしゃっていますが、“暮らすなら越谷”になるにはどうすべきかということです。実はこういうふうには魚が引っくり返って死んでいても、子供たちはテレビで人を殺す場面を見ているから、全然知らぬふりをしているんですね。これでは私は将来が怖いような気がするんです。越谷のまちづくりの中でも基盤整備の関係で、ハードの面がどんどん進んで、緑がどんどんなくなっていく。実は、私は新潟県新発田市の生まれで、山紫水明のよい故郷だと思っていて、以前越谷の環境を否定していました。こんなところで子供がどのように育つのかなと思っていましたが、考えてみるとうちの子はここで育ったんですね。越谷の子供に写生をさせますと川を黒くかくんです。水色を知らないんですね。ある心理学者が子供に絵をかかせたら、子供の絵が荒れている。攻撃的な場面が多いたということのある新聞で読みましたが、やっぱり

同じだなと思いました。

行政面と私たちの関係の話をさせていただきたいと思います。例えば、犬のフンが多い、たばこの吸い殻が捨ててある。これをどうするか。条例をつくって罰金をとる。ただそれではだめだと思います。やはり、市民のうちの何パーセントかが火つけ役になってたばこの吸い殻を拾って歩くとか、犬のフンを拾って歩くとか、誰かがそれを見てだんだん広がっていくと思います。実は、日本道路百選に選ばれております草加松並木の蒲生から百代橋の間は、たばこの吸い殻一つ落ちていません。4、5人の人たちが拾っていて、それを見た人が捨てなくなったり、犬のフンもありません。こういうふうにして裾野が広がっていくと思います。それだけに自然破壊をしたものを元に戻すには大変で、その中に犠牲になっていくものは、環境の中で育つ子供だとか、いろいろな問題があるわけでございます。

私の方から提案したいのは、市の行政の方では、環境のために具体的に都市基盤づくりのハードの面を今度はソフトの面に重点を置いていただきたい。それから、緑の保全等については、学校もビオトープなどで力を入れ始めてきましたが、自治会も360ございまして、各自治会に環境対策の関係の部をつくっていただきたいと思います。実は、愛宕町にはございしますが、空き缶拾いをしたり、ごみ拾いをしております。綾瀬川の川べりのごみ拾いもやります。そういうふうな自治会の活用もいいと思います。それから、屋敷林をできるだけ保存していきたい。

最後に、休耕田、遊休農地を活用する。実は、私こんな経験がございまして。15年ぐらい前でしようか、近くの蒲生南町の2～3年生のアキコちゃん、メグミちゃん、コウシン君の3人で朝ラジ体操を1年ほどやりました。子供たちに家庭菜園を2うねずつやせたんです。カボチャとサツマイモを作りました。カボチャは雄花と雌花があってと言ったら、子供たちはちゃんと知っているんです。サツマイモは地下に入っていますからわかりません。半年ぐらい経ったら土を掘っては触って、またかぶせてたりして、そして11月23日の勤労感謝の日には秤と写生の道具を持って

行って、さあ掘ってみようということで掘りました。一杯掘れてすごく喜んでいました。学校でもおやりになっているようですが、ある程度マンツーマンで、4、5人ぐらいが適正規模だと思います。あれが30人、40人になったら先生方は手に負えなくなると思います。それからアキコちゃんは、小指ほどの太さのイモまで持って行こうとするから、「それはつると同じで味が無いよ」と言ったら、「これはどんな味がするか食べてみたい」と言ったんです。自分で汗して、畑して、育てて、採ったときの喜び、そこに植物への愛情がわいて感謝の気持ちが出てきたと私は感じとったわけです。そんなふうにして越谷の少なくなっていく子供たちに、早くそういう自然になじませた方がいいと思います。

こういうことはいつ、どこで、誰が、何をどのようにやるかというむずかしい問題でございしますが、三鼎の律という言葉がございしますが、テーブルは足1本では引っくり返ります。独裁になりますね。2本だと対立になります。3本になって初めて安定し出します。さらには4本と。そういうふうには三方よしといいですか、自分もよい、相手もよい、第三者にもよい、こんなような形で取り組んでいけばうまくいくのではないかと思います。

暮らしてよかったまちづくりの動機づけ、そして組織網のための情報提供と交換、最後に意識革命、数十年後孫子に私たちが済まなかったと土下座して謝るようなことがないように、素晴らしい地球環境を残していきたいと思います。

時間を延長しまして、失礼いたしました。

○松岡 それでは、青木さんお願いいたします。



青木 玲子氏

○青木 皆さんこんにちは、青木です。私は越谷のまさしく典型的な新興市民と言いますか、結婚

してここに住んで、ここで子供2人を育て、今に至っております。子供たちは、プレハブの教室で勉強し、また下水の騒ぎや、産業廃棄物が何とやらという騒ぎも起きて、私自身は田村先生が先ほどおっしゃったように、老後を住むときにどうしようかな、この越谷は老後を住むのに値する街かなというふうに思いながら今住んでいる状況です。

私は、今東京都が作りました男女平等のための施設であります、東京ウイメンズプラザに勤めておまして、十数年男女平等推進の仕事しております。2年前から越谷市の男女共生まちづくり推進市民会議の専門委員として関わらせていただいております。

皆さんは、越谷市の男女共生まちづくり推進市民会議というのをご存じでしょうか。実は、今年度の新しい委員の方25名が公募で決まりました。私も全国のいろいろな情報を集めているのですが、越谷市ほど男女共生のまちづくりに画期的な組織を持っているところはなかなかありません。25人もの市民を募集して、そして行政と共に男女平等のまちづくりを進めようという市は、めったありません。私はこのことは越谷市で誇るべきことだと思います。

この「越谷市男女共生のまちづくり推進市民会議」は、市民会議と言わせていただきますが、これもご存じでしょうか、「越谷市男女共生プラン」というのがあります。ここにはまさしく男女共同参画のまちづくりの推進という項目があります。一つは、多様なライフスタイルに応じた地域参加の促進、活動交流ネットワークの促進というように、方針決定の場合の女性の参画などをうたったプランがあります。これを市が今推進しているところですし、次の年に向かって新しい計画もつくり始めるということをやっております。

今回、この会議に「女性の視点」でまちづくりについて考えてみたいと思って参加しました。女性の目で見るとか、女性の視点でということはこの頃よく聞かれると思います。ときどき女性は生活者の視点であるとか、女・子供・年寄りみたいにくられて弱者の視点であるとか、エコロジーの視点であるとかということもよく言

われます。確かにそういう一面もあります。ただ、それで限定されるとやっぱりいやだなという気もあって、女性だってここで生きていて、いろんなことができるのよと言いたいと思うんです。男女共生というのは、女性だけではなくて、男性のことも考える。そして、もう女性は、それこそ戦後靴下と何とやらで、強いですよと私はよく言われるんですけども、実状はどうでしょうか。果たしてこの社会は、女性が自由に発言でき、女性が発言したことがきちっと受け入れられている社会だ、というふうには私はとても思えないのです。

例えば、これは卑近な例ですけども、このまちづくりの会議に参加する前に、何人かの女性に「どんなことを言って欲しいですか」と聞いたときに「私たちはいろいろなことを言って、いろいろなことをやっているんだけど、なかなか上の方にはいかないのよね」ということなんですね。この「上の方にはいかないのよね」というのが実感だろうと思います。例えば、町内会のことを皆さん思い出していただけますでしょうか。今360ぐらいあるとおっしゃいましたけれども、会合に女性がたくさん出ていると思うんですね。ところが、名簿を見てみますと、みんなつれあいの男の人の名前になっている。だけど、実際にいろいろ町内会の仕事をやっているのは女性であって、そこで決められたこともかなり女性の意見が反映されていると思うのですが、なかなか町内会長にもなれないし、何だか長とつくものは全部男性であるような形が多く見られるのではないのでしょうか。確かに、先程の女性の方達の意見はもっともだなあと思います。

私は、まちづくりの参加に女性の視点をということも言いたいんですが、「女性の視点を」とか、「意見を反映して下さい」ということだけではなくて、確実にシステム化をしていただきたいと思っています。まちづくりを支えるシステムの中に女性がきちっと参加していく。その参加していく方法として、確かにこれから何かまちづくりに向かっていろいろな会議が開かれるでしょう。多分、越谷では「越谷市男女共生プラン」もありますので、何人かは女性が委員として入る。今ここは2人入っていますね。こういう形でちゃんと女

性は入っているのですが、半分ぐらいかなと思うとそうでもないし、長かなと思うとそうでもないということがありますので、きちっと女性の意見が反映されたり、ポジションにつけるような形のシステムを是非つくっていただきたい。市役所のシステムも、例えばまちづくりのところには何人かの女性の職員がきちっと入っていて、行政マンとしての女性の意見も反映するようなシステムを是非作っていただきたいと思っております。

次に、山田先生が少子化の問題を言われましたけれども、少子化の問題の中で言われていますのが労働力不足です。これから女性が働く社会になると思います。また、市民会議も今年は2年間かけて女性の労働について調査・研究をするということになっていますが、果たして越谷市は女性が働きやすいような街であるのだろうかと思います。例えば、駅前保育ステーションというのをご存じでしょうか。駅前に保育ステーションを設置することを越谷市も先駆けてやっていますが、いろいろところで女性が働きやすいというような環境づくり、それはすぐに子育てにもつながることだと思います。女性がこの街で働ける環境づくりということも是非推進していただきたいと思います。

それから、同じ働くということでも、働くと言えば会社に行ったり、どこかで雇われて働くということになりますが、この越谷では女性たちが多様な働き方をしています。例えば、ボランティアとか、福祉のことでは老人食をつくるとか、介護のことというふうにとたくさん働いています。アンペイドワークというキーワードがありますが、きちっと報酬をもらえないような形で、労働力を奉仕するような形で働いていることが多いと思います。そのことについて、すぐにお金を払って下さいとは言いませんが、そういう働きをしている女性たちの価値を是非認めていただきたいと思います。そういう働きを含めて越谷市のまちづくりが成り立っているんだ、ということも是非皆さんにわかっていただきたいと思います。

これも山田先生のお話の中にありましたが、高齢化社会を迎えて21世紀はおばあちゃん社会になるのではないかとありますが、

女性が長生きをしたときに、その過程で介護の問題は大変重要になります。男性は女性が介護をするという期待がありますが、女性は誰が介護してくれるんだろうかという不安もあります。女性が長生きするということと介護の問題は微妙に組み合って、これからの高齢化社会について、私たち女性もまちづくりのなかでそのことをどうするかを考えなければいけないと思います。

女性は細かいことについていろいろな提案をすることが出来ると思います。それは先ほど余りこれにこだわっては困ると申し上げましたが、生活者の視点はやはり今の状況では女性の方が持っていると思います。先ほど野島先生が、人と人との関わり方の文化ということをおっしゃいましたけれども、私はそれを聞いたときに、「それなら女性に任せて」と思ったんです。市民会議では、去年2年間かけて女性のネットワークを課題としてやりました。そのときに女性の団体、グループを調べましたら、たくさんの女性たちが実に多くのネットワークを持っていろいろな情報交換をやっているわけです。その情報交換というのは、市のあそこには何かあるとか、どういう人がいるとか、どこに何かあってどんなことをやっているか、というものすごい量の情報を女性たちは持っていて、これは越谷のシンクタンクになるのではないかと考えています。これを是非活用していただきたいと思います。

それから、まちづくりのときにいろいろな計画を立てますが、私は計画を「一歩先に進めてもらいたい」と思います。例えば、安全に歩けるような道をつくりたいと思ったときに、同時に楽しく歩きたいという気持ちがあると思うんです。ただ、歩くだけではなく、そこに何か楽しいこととか、わくわくすることとか、先ほどもおっしゃっていたように生き生きとするようなことをもう一つ是非つけ加えるようなまちづくりの計画を考えたいと思います。

最後に言わせていただきたいのは、午前中の市民会議でこのフォーラムに出ますので、何か言いたいことがありますかと皆さんにお尋ねしましたら、幾つかのことが出ました。その中で、トイレの整備をしてもらいたいというのがありました。



ウォーキングなどをして歩いているけれども、なかなかトイレの問題が困るということ。それから道路について、先ほど大きな道路の整備の話がありましたけれども、大きな道から行く小さな道、その小さな道こそ整備してもらいたいということがありました。それからベビーカーで通るとき困るので平らにしてもらいたい。それから騒音の問題。それから電線がなくなるような美しい街にってもらいたい、駅前の駐車場とかモラルの問題も出ておりました。公園にベンチが欲しいとか、事ほどさように皆さんはたくさんの意見を持ってまして、ちょっと聞いてもこれだけの意見が出てくるということで、まちづくりに関する並々ならぬ女性たちの熱気を是非伝えたいと思います。

○松岡 どうもありがとうございました。今出された5人の先生方のお話を簡単に整理しておきますと、岸井先生からは、越谷のまちづくりはこれから本格的に取り組む時期にきた。その意味では非常にいい時期で、この時期を大事にすべきではないか。大きな意味での問題提起というか、励ましてみたいものがあったと思います。その中で特にポイントなのは、個性と連携という言い方で出ていました。それは、越谷の特徴として30万だけれども、小さな都市を連携したような形で30万人になっている。この構造を大事にしながらまちづくりを行っていくべきだ。越谷市は、5万人ぐらいの都市が6つぐらい合わかさっている。その5万人ぐらいの持っている個性を大事にしながらどう連携していくか。これがバラバラでは困るので、どこかでそれぞれのところがうまく交流しながら、連携も出来る要となるような空間をつくっていったらいいだう、というような話だと思います。特に、焦らずに、まちづくりは時間をかけてやれば必ずいいものになるんだからということで、神戸などの事例を出していただきながら話をいただいたと思います。これからは今までの都市のあり方、首都圏の構造のあり方も大きく変わるので、それを見据えながら今言ったようなことを大事にしながらまちづくりをやられたらどうか、という話があったと思います。

それから、野島先生の方から、一言で言えば二足のわらじという言い方をされていましたが、人

と人との関わりの文化を大事にしていくべきだ。大体物ができまちが出来て、その後どう運営し、管理していくか、どうやってそれをルールにしていくかということが、その後で非常に重要となる。その要が人と人との関わり方で、それは文化と言えるようなものだ。それをどう越谷でつくっていくかという話だったと思います。人と人との関わりをつくる文化というのは、多分、どうルールをつくって、街をどう運営して活用していくか、先ほどの田村先生の話と重なるような問題提起で、そこを大事にしたらいい、それができないわけがなく、かなりそういう芽が今越谷にできている、という話だったと思います。

それを受けて山田先生は、そういう文化をシステムというかパートナー、要するに福祉の例を挙げながら、そういう文化を具体的に形にしていけたらよい。どういうことかという、今までの人と人とのつながりは、ある意味ではサークルとかのつながりで、地域というよりもある人とあるところで、決して地域でつながっているわけではなく、趣味でつながっている。そういう意味では、地域性が非常に弱かった。これからは日常生活圏、歩ける範囲で福祉なども考えなければいけない。いろんな課題もみんなそこでやっていかなければいけない。そうすると、そういうところは介護も含めてどのようにしてできるのか。それは、恐らくこういう言い方が適切かどうかわかりませんが、青木先生から出たように、いろいろと地域の中で皆さんが参加をして、行政だけがやるのではなくて我々もやる、というようなところのルール、そういう新しい社会をどうつくるのか。今日、1部の方で質問も出ていましたけれども、恐らくルールとか参加の形はまだないと思うんですけれども、それをどうこれからつくり上げていくのか、という話が3人の先生からあったと思います。

それを受けて澁谷さんの方では、いろんな事例を挙げていただきながら、越谷の資源というか資産みたいなものをいろいろ報告してくれたと思います。一つは、綾瀬川の話もあるけれども、豊かな自然と歴史、そういう地形を持っている地域だ。この地形も大事にしなければいけないというだけではなくて、人が資源としてあるではないか。そ

ういう人たちにどうこれから動議づけをし、その経験を蓄積しながら意識革命していけば、必ず今言った先生方の提案は応えられていくのではないかと、というのが澁谷さんから言われた話だと思います。

同じように、青木さんからも越谷でやっている男女共生社会の活動もまちづくりまで発展している例は全国にもない。そういう意味では、女性の中にもそういう面もあるし、いろんな意味でこれも大切な資産というか、越谷が持っている大きな力だということで、これを反映しながら具体的に参加のシステムをみんなで作っていくことが課題ではないか、という話が出されたと思います。

時間がなかったものですから、15分の予定を先ほど10分にしてしまっ、多分話さなければいけないことを省略されたこともあるのではないかと思いますので、2、3分で追加していただこうと思います。申しわけございませんが、澁谷さんと青木さんはお話いただいたようですから省略させていただいて、山田さんから追加があればお話をお願いしたいと思います。

○山田 先ほど諸先生のお話を伺いまして、やはりキーワードは女性かなという気がしております。当事者でもあり、担い手でもあり、地域の中心的な存在であるのは女性なのかもしれない。福祉国家の先進国と言われるスウェーデンなどは、福祉国家の実験室と言われて、いろいろな取り組みをしていますけれども、非常に女性が活躍している。というところを考えると、キーワードというか、資源としては非常に女性がキーワードになっていると感じました。

それから、アンペイドワークということですが、例えば寝たきりとか、精神活動が低下されているようなお年寄りが増えてまいりますと、24時間の質の高いケアが要求されてくる時代になってきておりますので、ケアの仕事ペイドワークにしていかなければならない。それからケアの質を考えると、今までは女性の仕事としてケアの仕事をやってきたわけですが、サービスの質の問題などを考えると、同性介護の時代になってきていますから、高齢者は女性が多いですけれども、やはり同じような比率で男性の

介護者も非常に重要です。プロパーの職員がコアになって、それから地域のケアシステムができ上がってくると思います。そういう意味では、様々な福祉関係の仕事について、どういうふうペイドワークとして確立させていくか。やはり市がバックアップとしてやらざるを得ない。そしてそれを盛り上げるような形で住民が自発的に参加していく。そういう二重、三重のいろんな輪の中で高齢者の問題を考えていかなければならないと思っております。

それから将来の担い手を育てるという意味では、やはり教育現場と福祉、医療と福祉の連携は当然のように言われておりますけれども、教育現場と福祉、医療などのところ、あるいは建築もそうですけれども、実際に日常的な関わりの中でもっともっと日常的な交流をする必要があると思います。男女共生もそうですけれども、人権を大切にする文化をそういった地域の広がりの中で様々なプロの集団、あるいは一般市民の集団が多重的に層をつくって、そういう中で厚みのある地域社会の構築が大切かなと思っております。そうすると、お金が幾らあっても足りないというようなことをきとおっしゃるだろうと思っておりますけれども、やはり物ではなくて、人でありソフトの面を充実することによって、物を超えるものが出てくるはずですので、既存の施設などを有効に利用しながら、新たな展開も考えられるのではないかと思っております。以上です。

○松岡 野島先生、お願いいたします。

○野島 先ほど10分というふうにおっしゃられて、実は9分しか使っていませんでした。この1分をどう取り戻そうかと思つて。ちょうどコーディネーターの松岡さんから機会をいただきました。先ほどの松岡さんの要約が大変私としてはありがたかった。つまり、関わり文化というものを抽象的に言つても、やはり具体的にどういうルールでそれが動いていくのかということが非常に重要なんですね。ルールということを考えていきますと、基本的には関わりというのは、誰かが関わってくれるわけではなくて、自分から関わっていく、これが大原則だと思います。いわば自分発ということですね。

その上で具体的に感じることを申しますと、まず自分発といったときに、何を自分はやりたいのか、将来に向かってどうなりたいのか、そういうことを私たちは余り言わないという暗黙のルールがあり過ぎたように思うのです。例えば、私が前にPTAの役員をやったことがあります。しばしば会合があるんですが、皆さんその場ではほとんどおっしゃらないんですね。解散して帰るときになるとお母さんたちがまとまって、いろいろな話を始めて帰らないんですね。そのときの方がむしろ生産的な話がなされているのではないかと思われるところがありました。やはり、私たちは思っていることをしかるべき場所できちっと言うことが第一の自分発ではなかろうかと思えます。

もう1つ。例えばグループをつくって、自治会、PTA、あるいはボランティアのグループと様々なグループがあるわけですが、その中で組織の1人として何かの発言をしていくということがあろうかと思えます。そのときに自分ができるとはちゃんとできると言って手を挙げていくということ、これは非常に重要だと思うのです。人が推薦してくれたら私はやりますとか、はっきりと私はこれはできますとおっしゃらないということがあると思えます。もちろん自分よりももっとちゃんとできる人がいればその人を推薦することは大変なことだと思いますが。

体験したことですが、県のボランティアの会議がありまして、県内様々なところから活動家がお見えになって、これから埼玉県でどのように活動を進めていこうかということのを討議していました。その時の委員長の決め方なんですけれど、行政の方が私に内々に委員長をやって下さいと依頼されました。まず委員長選出の話を切り出して、どなたがいいでしょうということになります。そうするとしばらく沈黙があって、その後委員の一人が原案がないんですかと事務局の方に振りますから、そうしたら事務局の方で私の名前を出すと、こういう段取りだったんです。実際、事務局がこのシナリオをやり始めましたら、ある委員の方が発言されて「そういうやり方はやめましょうよ」とおっしゃるんですね。結局、それぞれの持っている力量ですとか、経験ですとかを簡単に自己紹介

しながら委員長、副委員長を決めていこうということになりました。結果的に私はそのとき委員長になりましたけれど、その委員の発言を聞いて、グループ運営をよく考えて活動されている方だなあとつくづく感心しました。

今年もやはり委員長決めがありまして、誰かが私のことを推薦して下さいました。私は自分なりにできると思いましたから引き受けてもいいと思っていましたら、他の委員が他の方を委員長に推薦されたんですね。推薦が1人だったらさっと決まるのに、あなたよりももっといい人がいるからと言われますと、これは対抗馬が出たということになりますね。結果的にはまた私になりました。その後他の人を推薦した委員に会いました。その方は、「先ほどは失礼しました」と言われました。本当はそうは思っていないと思いますけれども。社交辞令として。しかしその後の言葉が非常に印象的なんです。「野島さんは、多分対抗馬を出してもそのことを受け入れてくれる人だと思いましたから、私は発言しました」とおっしゃったんですね。自分には事情があってできない、あるいはもっといい人がいると思ったらその人をちゃんと推薦する。こういうルール感。つまり、まず手を挙げて、自分がやる、誰々がいい、そういうことをきちっと言っていくことがグループの中で人間関係のルールをつくっていくときに非常に大事なことだと思います。

まとめて申しますと、簡単な話なんです。グループの基本的なルールというのは、言わないよりも言った方がいいということ。それからやらないよりもやった方がいいということだと思います。そういう大変基本的なことを私たちが実際の生活の中で発言し、実行していくことが大事だと思います。

○松岡 それでは、岸井先生お願いいたします。

○岸井 バックグラウンドのお話を飛ばしましたが、私は土木とか建築とか、いわゆる空間に関わることをやってきております。今日は皆さんからソフトの部分のお話が出るだろうということで、私自身はあえてハードに偏った話をするつもりで来ておりますし、させていただこうと思います。従って、参画をするとか、ソフトウェアが重要で

あるとかは当たり前のことであると私は思っていて、その上でさらにこういうことを是非お考えいただきたいということを申し上げるつもりです。

1つは、越谷は1つではないんですね。地域差が厳然としてあるんです。これはお住まいになっていればおわかりかと思いますが、先行的に区画整理をやったところは道路があり、公園があり、広い道路には歩道がついております。そうでないところは、残念ながら消防車も入っていけないような道が曲がってついておったり、下水道も十分でなかったりという地域もまだございます。実はそれぞれに問題がやや違っているということがございます。初めから全部やっておけばよかったじゃないかといわれれば、おっしゃるとおりでやればよかったんですができなかったわけですね。現状そういう問題があることは事実である、ということは認識しなければいけないと思います。そういうような地域でそれぞれの課題がみんなにあるという中で、同時に、私が先ほどお話ししたのは、そういう問題は皆さん日々感じていらっしゃる。それに加えて総合振興計画という全体の市の将来性を語るときには、是非広い目で越谷市を一步下がって見てみていただきたいとか、あるいは流れをちゃんと読んでみましょうとか、あるいは少し長い目で見て計画をつくってみませんか、こういうふうなお話をしたつもりでございます。

従来から、ハードな方は道路とか、公園、下水道、いわば最低限必要な施設のことをよくしゃべるがゆえに、それだけにとどまってしまうというケースが多々あるわけですが、実際には、今日の基調講演のお話の中にもございましたが、何を我々が空間に求めるのか。我々はその空間を前の方たちから引き継いでいるわけです。その空間をさらによくするために我々は努力をし、さらにそれを子供たちに引き継いでいくというような、そういう中に我々はいらんだらうと思っております。

先ほど30分の5が歴史と言いましたが、実は歴史があるというのは非常に重要なことです。歴史、自然、地形というのは非常に重要なことでありまして、この部分にある種の糸口を見つけるといのが往々にしてやられる方法ですし、有効な方法だと思えます。ただ、それだけがすべてでは

ない。新しい街も実際にはみんなの中で工夫をして、これから歴史をつくれるんだという気がするわけでございます、ソフトなシステムが十分でないところが一杯ございますので、そういうことをやりながら、そのシステムを担保できる空間の方もお考えをいただきたいということを申し上げたいと思います。

○松岡 どうもありがとうございました。

今日はパネルディスカッションということもありますので、今度は会場の皆さんから質問よりも、できましたら提案とか意見をいただきたいと思えます。

○会場1 大袋に住んでおりますシミズと申します。2点ございます。1点は、保育についてです。越谷市の場合は保育所もかなりありますが、私が一番考えていますことは、学童保育のことです。というのは、全校に学童保育がありませんので、保育所でお世話になって、やっとこれで小学校に上がったなと思っても、学童保育がない学校に入った場合に、やはりまだ小さいのでかなり心配をしながら母親が仕事をしているという現状があります。ですから、青木先生がお調べになると先ほどおっしゃっていただきましたので、是非そういうような実態調査をしていただけたらありがたいなと思えます。

それからもう1点は、介護についてですけれども、突然家族の中で介護をしなければならぬ状況が生まれた場合、子供が小さい場合にちょっと預けたいと思うような施設がないということと、これからボランティアの拡大ということがありますが、そういうボランティアの拡大をさせるための考え方の一つなんですけれども、介護をなさっているボランティアの方が時間預託制度という、名前ははっきりと覚えていないんですけれども、そのような制度を取り入れて、私もボランティアをやりたいと思うような制度を是非取り入れていただけたらいいのではないのかなと思えます。

○松岡 どうもありがとうございました。

○会場2 ツツイと申します。今日のお話の中で非常に残念だったのは、地方予算の意見が全く出ませんでした。要するに、まちづくりというと一

番大きな問題は、街の商店街が死んでいる。空き店舗をどうするんだという問題がたくさんございます。越谷においても然りです。そういう中において、最近大店舗法が改正されまして、中心商店街活性化法ができる。それから大店法の立地法案ができる。こういう問題を越谷としてどう考えていくのか、これについて少しお話を賜りたいと思います。

○松岡 その辺の話は最後のまとめのところをお願いをしたいと思います。他にどなたかいらっしゃいませんか。

○会場3 先ほどの質問と多少重なるところがありますが、先ほど野島先生が言われた二足のわらじの話と関連をしまして、人と人との関わりの文化づくりで、今あるルールをつくり方も一つだと言われましたが、私はそれも一つだと思んですが、もうちょっと違うんじゃないかという感じがしております。それは、やはりコミュニケーションだという感じが非常にしています。今、本当に一番少なくなっているのは、他者がどうやって出会って、お互いにきちんとした議論ができるかどうか。例えばまちづくり一つとっても、今盛んにあちこちで行われているサークル、そういう人たちが他者とどうやって出会ってまちづくりを考えることが一緒にできるかどうか。私はそこところが、今私たちの側で言えばかなりのネックになっているのではないかと思います。そのことにやはりどうやって答えといいますか、いいアイデアがないだろうか。私自身も今地域でそういう動きを一生懸命やっていますが、いろいろなサークルをやっている人たちがたくさんおりますけれども、これが例えばまちづくりと一緒に考えようというところに、なかなか一歩踏み出せない、そのコミュニケーションがなかなかむずかしいという問題なんです。そこるところで、何かいいヒントがあれば教えていただきたいと思っております。

○松岡 ありがとうございます。他にどなたかいらっしゃいませんか。

○会場4 これはコメントです。まちづくりとして、文化や福祉や生涯学習、その他の建物をぽつんぽつんと建てるのではなく、道路でつないで広い面の中につくる必要があります。保健

センター、公民館、老人センター、児童館、図書館など1カ所ではなく数カ所もあるとか、家族でおじいさん、おばあさん、子供、孫などそういうことから地域の広がりが出てくると思います。

○松岡 ありがとうございます。

○会場5 今の方の発言とその前の方の発言の人と人との関わりとも重複すると思いますけれども、人と人との関わる中で、今までは横のつながりで同年代が多かったと思うんです。それを子供とお年寄り、お年寄り地域の方、いろんな方がごちゃ混ぜになってコミュニケーションが図れるように学校施設などの複合利用というんでしょうか、そういうものを推進していただきたいと思っております。

○松岡 ありがとうございます。

○会場6 今日の討論についてもう一度レビューしたいので、何か報告、書かれた物が出ますか。

○松岡 それは後で市の方に答えていただくようにします。

○会場7 蒲生に住んでおりますスガヌマでございます。やはりこういうパネルディスカッションというのは、先生方がいらっちゃって、チェアマンがいらっちゃって、テーマもこれだけたくさんありますから、なかなか意見というか、提案がクロスしない。ただ、お聞きしたことはそれなりにいろいろ勉強になりました。

今まで越谷の歴史というのは、素晴らしい建造物を建てて、アーバンゼーション、都市化をとにかく急ごうと、そういう意味では草加よりも、あるいは春日部よりもやはり都市化ということでは、全国670～680ある市の中ではなかなか近代都市になったと思います。ただ、今度の新しい板川市長さんは、越谷に住んでよかったと、人生のゲームセットに当たって、あるいは今この瞬間でも越谷に住んでいて、他に住んでいるよりもいろいろな意味でボランティアとか福祉の恩恵を受けられる、そういう市であることを他の市に住んでいる人に自慢できるというのが一つのメインのテーマではないかと思います。

私は、十数個ある公民館で、ありとあらゆるサークル、ボランティア活動、勉強会、お年寄り、若者にいろいろな機会を与えている、それが結構

文化の向上にもつながっているとかねがね思います。しいて言えば、本当に越谷に住んでいてよかったという実感を若干味わえるようになると思うんですが、この十数個の公民館を横にクロスする制度をつくって、市の教育委員会が束ねて街全体に波及させる。そういうようなテーマがあって、それを実現するにはどうしたらいいか、それぞれ公民館同士が張り合って、同じことを違った時期にやったりしていますので、横の連絡を取れたらいいなと私はいつも思っておりますので、これは5人の先生のうちの1人にお答えを簡単にいただけるとありがたいと思います。

○松岡 ありがとうございます。

○会場8 大沢に住んでおります。先ほどからまちづくり、それは人間関係、コミュニケーションということなんですが、私たちはコミュニケーションづくりが和気あいあい、もちろん目的はそうなんですが、ぶつかり合わない関係づくりを頭に描いてしまう。そうではなくて、喧嘩のできる関係づくり、そういったような意識革命がどうしても必要ではないかと思っております。そういう意味でいろいろな機会に喧嘩をしようよ、それを提案したいと思えます。

○会場9 蒲生に住みますイナガワです。先生たちのお話、それから発言された皆さんのご意見はとても素晴らしいご意見だと思えますが、立派な言葉も、立派な目標も私は少し置いておいて、もっと大事なことがあるのではないかなという気がします。それは、先ほどからおっしゃっております心の触れ合い、そんなことにつながると思えますが、下町のおつき合いで言われておりますように隣近所のおつき合い、それこそおかずが残ったから食べませんか、というように声をかける。そんな一声運動のリードを私たちがすべきではないかなという気がいたしました。私の年老いた両親は2人で暮らしております。残念ながら孫と3世代一緒に暮らすということは経験させられなかったわけですが、今3世代で一緒に暮らすということが老いをいかに遅くすることができるか、そんなことを痛感しております。

それから昨日NHKで「今、教室が荒れている」というのを見まして、なぜこうなるんだらう

か。子供たちは落ち着かないんですね。何か自分を表現しようということなんだと思うんですけども、みんなそれぞれの行動をしてしまっていて、勉強するような雰囲気ではないんです。先生も校長先生も皆さん頭を悩ませて会議をしているんですけども、わからないんです。私も考えました。子供たちはみんな関わりを持ちたいんです。でも、関わりを持ってない。そういう人との関わりをする雰囲気が今どこにもない、家庭にもなければ、隣近所にもない、地区にもない、そんな状態の中で子供たちは大きくなっているわけですね。

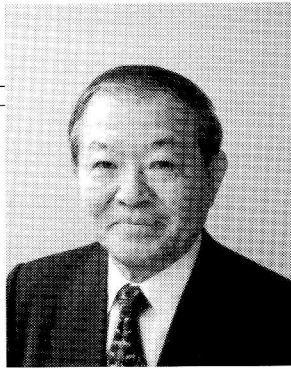
私はあすに向けたまちづくりではなくて、昨日、おととい、何十年前かに戻るべきではないかなといつも思うんです。日本は方向を誤ってしまったような気がするんです。どこまで戻ったらそれが訂正できるのかなとずっと考えておりますが、何十年以前に戻ればもしかしたら心の触れ合いのできる生き方ができるのかな、そんな環境の中で子供たちを育てることができるのかなと、そんなふうに毎日考えております。

突然で申し上げたいことがまとまりません。うまく伝わりましたかどうか、非常に不安でございますが、そんなことを考えました。

○松岡 ありがとうございます。時間がなくて意見をお伺いするのは終わりにしたいと思えます。今度の総合振興計画の中で市の方は、地域のまちづくり会議だとか、その議論を受けて公民館ごとにポスターセッションというんでしょうか、誰でも、いつの時間でも来て、いつでも意見が言える。それから関係する職員の方々も多分その場にいらっしゃるので、いろいろな話も聞こうと思えば聞ける。ある意味では、声の小さい人でも1対1ならいろんな意見も言えるだろうということ、そういう場を考えているようなので、できましたら今日言い残したことは言っていたいただければと思えます。

時間がありませんので、まとめに入りたいと思えます。田村先生がまだいらっしゃるので、今日は1日市民ということで、何か一言あれば発言していただきたいと思えます。

○田村 中身的にはいうことはないんですけども、こういう会議に私はよく行くんですが、これ



田村 明氏

だけ活発にご意見が出る、ご質問が出るというのはまずないんです。越谷はその意味では、日本一ではないかなと思います。皆さんが意見を持っていらっしゃる。しかも大変にこれから重要な問題をたくさん言われました。市民というのは急に集まったわけですから、その中で言いたいことも言わなくて、みんなでただ我慢しているのではなくて、大いに喧嘩もする。これができないと街が成り立たないんですね。昔の村は、確かにそんなことはなくてできました。でも、それができないんですね。先ほど戻ればいとおっしゃいましたが、そういう人たちが集まってしまったのでもう戻れないんですよ。でも、言いたいことも言わなくてやるのではなくて、皆さんで言いながらケンカに終らせず、その中でお互いに理解し合っていて、一緒にやろうじゃないかという気持ちは持っている、ということが重要だと思います。これだけ率直に言われて、なおかつ皆さんがそういう気持ちを恐らく持っていらっしゃるのではないかなと思います。私は日本全国回っておりますけれども、素晴らしい街だなと思って、非常に感心いたしました。

○松岡 どうもありがとうございました。

幾つか質問が出ておりましたが、具体的にお答えした方がいい質問については、ここでお答えしておきます。

1つは、本日のまちづくりフォーラムの内容についてまとめたものを出すのかという話がありましたが、市の方では、報告書を作成する予定にしているようです。要約みたいなものについては、広報、ないしインターネットのホームページに掲載しますので、どなたでも見られるように処理しますということです。

それから2つありまして、1つは商店街の話と、もう1つは、コミュニケーションをどうしたらいいかという話がありました。この2つについて、先生方から個別にご意見を伺って、それからいろんな意見も出まして、その意見についてどう思うか、お答えして欲しいというご発言もありましたので、最後に先生方に感想を交えてまとめみたいなものを発言していただきますので、それに代えていただければと思っております。

まず最初に、商業施設についての話ですと、岸井先生が一番適任ではないかと思っておりますので、よろしく願いいたします。

○岸井 今、全国同じように商業問題は大変ホットな話題です。大規模小売店舗法の改正が出るたびに日本中でこういうふうになるわけですが、私の個人的な意見を申し上げますと、商業は基本的には競争です。それについて、公共側がどうこう言うのは必ずしもプラスではないだろうと思っております。ただし、実体的に今どういうことが世の中で起きているかといいますと、従来商業が集積していた中心市街地では、人口が減少をして、残っていらっしゃるのは高齢の単身者が非常に多いということです。高齢の単身者の街になってしまった。これは非常に危険である。防犯上、防災上も危険ですし、街のバランスとしてもよくない。そういう意味では、中心市街地については我々自身考えるべきだろうと思っておりますし、私自身は、駅前商店街という空間は、日本的に非常に意味がある空間だと思っております。

先ほど途中を飛ばしてコンパクトな街がいいと思っておりますというお話をしましたけれども、私自身はコンパクトな街をつくるべきで、駅前商店街は交流の広場としては非常に意味がある。ただし、残念ながら商売の環境としてそれが勝てる環境かどうかというのは努力にもよりますし、今のままではなかなか厳しい。つまり、何時まであいているかもわからない、そういうふうに個々人の方たちがバラバラのままでは、郊外のショッピングセンターに勝てるはずがない。最低皆で協力して、ショッピングセンターでやっている程度のことにはまずやっていただかないと話が始まらない。さらに言いますと、もし越谷が郊外ショッピング

センターを拒否したとしましても、春日部でやろうとする。さあどうするんだ、という問題がありますね。

そうなりますと、市民の皆さんが中心市街地を大事にしようと思うか思わないかが分かれ目でありまして、やはり中心市街地のあの楽しさを維持しようと思わないと、皆さん郊外の同じようなパターンのショッピングセンターに買い物に行っただけで、そこでおしまいということになります。これはいかに何をやろうがそうになってしまうという気がするわけでございまして、私自身は、コンパクトな駅前商店街は大事にすべきだと思いますけれども、それを中心の話題として総合振興計画の中でどのぐらい公共の施策としてやるべきかは、ややそれだけでは問題があるかなというのが感想でございます。

○松岡 どうもありがとうございました。コミュニケーションの話については、恐らく皆さんいろいろな経験をお持ちでしょうが、実践でやられている市民の方々の方が具体的な話としてはよいのかなと思いますが、澁谷さんか、青木さんいかがですか。

○澁谷 余りむずかしく考えますとわからなくなってくるので、簡単に考えますと、例えば、私は今自治会長をやっていますが、うまくいってもともとですね。何かあると陰口を言われたり、家族までいやな思いをします。それは自分の精神修養の場だと思えば大概我慢できます。そうすると、どこかで見えていますから私の評価も上がるかもしれません。次の自治会長をまたがんばることになるでしょう。それは冗談ですが。

先ほど言い忘れましたが、これがキタミ草です（カラーの絵を示して）。花の大きさは2ミリぐらいです。葉の丈は5センチぐらいです。毎年11月頃になりますと、用水の水を落とした後咲き出しますから、そのときにみんなでクリーン作戦をやって、キタミ草を見学しようという案内が広報こしがやに載りますから、今日ここにいらっしゃった方半分ぐらいは来て下さい。余り大勢来られると踏みつぶされて可愛そうですね。

○松岡 どうもありがとうございました。約束の時間は過ぎていますが、できましたら先生方に一

言感想と、ないしはつけ足しも含めてお願いしたいと思います。

青木さんからお願いいたします。

○青木 本当に今ここに来ている皆さんと同じように、ここでいろいろなことをお聞きしたいという気持ちが私の中であって、膝詰めでいろいろな話をしたいなという思いが今いたしております。

私の仕事の関係から言いますと、まちづくりのこれからは情報がどの様に伝達されるかが大切な問題となると思います。コミュニケーションの基盤は、伝えること、伝え合うことだと思います。市のシステムも回覧板のひとつ、ポスターのひとつ、チラシのひとつから本当に情報がしっかりと伝わっているのだろうかという見直しが必要だと思っています。それからインターネットの話も出ましたけれども、様々なメディアにトライをして、市民の方も情報の双方向ということを考えて、要求していくこともまちづくりの中の基本的なことではないかなと思っております。

○松岡 どうもありがとうございました。澁谷さんお願いいたします。

○澁谷 約150人の方が今日おられますけれども、市長さんがずうっと最初からいらっしゃったということは非常にインパクトが大きかったような気がいたします。そんなわけで、幾らか市長さんを意識しながらお話をした面もありますのが、いろいろ粗辞雑言が多く失礼いたしました。

○松岡 山田さんお願いいたします。

○山田 やはり喧嘩のできる地域づくりが基本かもしれません。何もなければそれなりに暮らしていけるかもしれません。何かの問題を共通で議論するというので、そこで喧嘩をしながらやっていく。いろいろなまちづくりをやっている人たちから聞くと、例えば行政の職員が医師会の会長と殴り合い寸前までとことん議論して保健と福祉、医療の連携を10年ぐらいかけてやってきたという地域もありますし、具体的な個々の事例から出発してまちづくりを各層関わりながらやっていくということ以外にないかもしれないと思っております。そういう意味では、行政は非常に大きな役割を果たして、市民は自分たちで何かできるかもしれないけれども、それだけじゃなくて福祉な



どは特に、やはり制度として確立しなければならないところがありますので、行政はそういう意味では、自分で情報を取り込めない方々の家まで行って、具体的な情報を提供するようなシステムも一方でつくらなければならないだろうと思っております。喧嘩のできる地域づくりを期待したいと思っております。

○松岡 野島先生お願いいたします。

○野島 先ほど関わりの文化ということを申し上げましたけれど、先ほどご発言をいただきましたが、コミュニケーションという言葉に置き換えても全く同じだと私は思っています。コミュニケーションというのは、言葉だけではなくて、一緒に活動したり、あるいはお互いに慰め合ったりとか励まし合ったり、これもコミュニケーションであって、そうしたコミュニケーションの総量がまだまだ私たちには不足している、これから発展できるのではないかと考えています。

それから、喧嘩ができるということ、まさにそのとおりだと思います。先ほど私は子供たちの遊びになぞらえてすり傷といういい方で申し上げましたけれど、例えば子供の喧嘩を見ていますと、何かこういうものが欲しいとかで喧嘩するのであって、欲しいと思わない人たちは喧嘩しないわけですね。欲求を引き出す共通の関心を私たちが持っていること自体非常に大事なことだと思います。喧嘩をする場合、その前提には共通する関心や欲求がないと喧嘩にならないということだと思います。だから、例えば越谷で何か1つの問題について意見が相違するといっても、お互いに越谷が好きだとか、越谷の発展に関心があるということが前提になれば喧嘩にならないだろうと思います。ですから、その前提をお互いにつくりながら、これはコミュニケーションということだと思いますが、その上で喧嘩をどんどんやっていくことが必要だろうと思います。

もう1つ。先ほどご発言がありました、となり近所とか家族の問題、これは非常に大きな問題ですが、それでは20年前、30年前の状態に私たちが戻ることができるかということ、必ずしもそうではないと私は考えています。例えば、公民館でおやじの料理教室とかがあったりして、そういう

ようなところであなたもこの近くですか、という会話が交わされ近所の関係に戻ってこられる。そういうようなことを考えますと、これからの家族の価値とか、あるいはとなり近所の人間関係のよさをもう一度見直すきっかけは、その中にあるというよりも、むしろ一度、より広い地域の関係に入っていくことで、もう一度家族・近隣の価値に戻ることができる。

介護の問題なども出ていましたけれど、それを考えるときにはやはり近所、あるいは家族だけでは、その関わりの中で到底解決できない問題が出てきます。家族、近隣、そしてもう一つ大きなサイズの地域の中で進んで関わりを持っていくことがより一層大事になるのではないかと考えています。

○松岡 どうもありがとうございました。岸井先生お願いいたします。

○岸井 越谷市は東武鉄道が引かれてほぼ100年経って、ようやく鉄道が上がって東西の街が一体になった。また30年に市制をしかれて40年経った。40年前市制がしかれた頃に最初にまちづくりを考えたとき、この辺の地域は工業を一生懸命導入しようというプランでした。それから一気にここまで走ってきたわけです。ようやく高架ができて東西がつながり、何とか水も昔ほどのことはなくなった。昔はすぐに水に浸かっていたわけですから、それも何とか克服してきた。ようやく21世紀に向かって本格的にスタートを切れるときなのではないのかという気がいたします。

この時期に新しいプランをおつくりになるわけですが、私自身は、最終的な報告書ができること自体は余り意味がないと考えております。絵ができてもしようがないし、レポートができてもしようがないので、問題はそれをつくり上げる過程とそれをまた見直す過程だと思います。報告書をつくったことに満足しないで、まず地域をよく見聞きして、我々の思っている問題をまず理解する。問題が理解できればかなりの部分は解決するという気がいたします。21世紀に向かって、私たちの子供たちが楽しく生活できる越谷市をつくらせていただきたいと思っております。

○松岡 どうもありがとうございました。時間が

過ぎてしまいましたので、これで終わりにしたいと思いますが、今日皆さんからいろいろな意見が出ました。最後に報告書をつくるよりもつくる過程が非常に大事なんだと、どういうふうにつくり上げるかということが非常に大事なことなんだと岸井先生が言われました。今回越谷市は総合振興計画をつくる上で住民参加を行う、今日がその取っかかりになると思います。これから地域に入っているいろいろな方法で皆さんの意見を聞きなが

ら計画をつくっていくことが大きな方針のようです。そういう意味では、恐らく一番元気づけられているのは市の方かもしれませんが、今回は市民とともに総合振興計画を作りあげる最初の一步として、今後いい過程の中でいい将来計画をつくるというふうにしていきたいと思いますので、皆さんの積極的な参加をお願いします。今日はどうもありがとうございました。

## アンケート集計結果

### 市制40周年記念 まちづくりフォーラム アンケートより

**問** 越谷市では、計画的なまちづくりを行うため、西暦2000年（平成12年）をスタートとする第3次総合振興計画の策定に入ります。そこで、今後の市政に対する、ご意見、ご要望など、どんなことでも結構ですので、お書きください。

#### 答（以下は、アンケートの回答のままです）

- 第2次総合振興計画地区策定に参画しましたが、今日、市は着実に、確かな町づくりが実践されております。これも前市長のリーダーシップのもと、将来を見つめ、次年代の為に量より質に早期の転換をはかり、すすめられた結果であろうと思います。  
今回の「あすに向けたまちづくり」を市民参加による、市民の安全と、心地良い町づくりをめざしてスタートしたことは意義深いものであります。急がず、そして計画的なプランをもって、アメニティな町づくりを期待致します。
- 骨太の計画をするので、時間がかかるのは良くわかるのですが、もう少し短縮してもらいたい。  
越谷市に住んで50年昔父親が良く酒を飲みながら越谷の町づくりは将来このようになるのだと言っていた。  
今、そのとおりになっている。子供ごころに、このおやじ何を夢のような話をしているのだと思ったが、その通りになった。長生きしていれば、今の越谷もみられたらうにと残念。
- 小中学生から老人に至る道の人達の教育と指導参加を呼びかけて行く事が未来への大きな役割をはたして行くのでは。  
今やらなければおそくなってしまふ、後からの整備で。後始末では先進国の名に恥じる。親と子が一体となって家庭から大きな声が持ち上がる様にしたいもの。
- 越谷市に住んで約25年近くになりますが、以前神奈川の川崎に住んでいた20年前によくおいついてきたかなと思います。  
北越谷駅前、少しも変化していません。もう下水工事は結構です。高齢化社会に対応できる、仲の良い町づくりを目指せたら良いと思う！！
- 市民はいろいろな意見をもっています。第3次総合振興計画のさくていにあたって、市民のいろいろな意見を聞き、すばらしいものができるよう願っています。  
市からいろいろな情報を発信していますが、これを市民が自ら受信しようという気持ちを持つように市側もPR等につとめてほしい。
- 途中からの参加なので何と言って良いかわかりませんが、皆さんの意見にもありましたが「あすに向けたまちづくり」ということなので教育関係の方の話等も聞かせていただきかったです。学校の複合利用という意見がありました。地域と子供のかかわりが子供会だけでなくもっとあったらと思います。もっと若い年代の方の参加もあると良かった。
- 市民が安心して暮らせる町に期待いたします。今後の農業の在り方は？都市と農村との調和のとれた町づくり

- 計画的なまちづくりのプログラムの作成が必要と思います。具体的な内容をじっくり練り上げて下さい、急がずに。基本的には市民参加が原則です。市内の全自治会の意見をまとめることも必要。町づくりに対する考えはみんなもっていると思う。

レイクタウン構想はもっと長い目で計画を見なおすべきです。宿場町越谷の歴史も見過ごすべきではないと思います。

- 具体的に実現することを期待しています。
- 松岡さんの司会素晴らしい。頭の良い人だと感服した。

東京オリンピック開催の前年に東京墨田区寺島町から移住してきました。日本の高度成長と共に目覚ましい発展を遂げ、現在も自治体の中で、極めて健全な市財政を保ちつつあるようで同慶の至りです。今後はより一層の緑化に財源を投じ（特に次回 W 杯には）世界中からサポーター達が越谷にも流れ込み生涯忘れ得ない思い出を抱えて帰国するような「みどりの越谷」作りを目指しましょう。

（個人の協力と相俟ち）

田村明講師のいわれたように越谷の歴史を知ることも、その前提だと思うが結局市民一人一人の自覚がアルファにしてオメガなるべし。〔なお、道路交通法の中での歩行者の遵則（右側通行の原則）についてキャンペーンを張って下さい。〕

欧米人が不満を抱いているのが、日本都市の歩行者のマナーの悪さです。

- ①まちづくりの方向性の確認のため「テーマ」づくり（第2次計画をさらに発展させるものが望ましい。）—市民のアイデア（ニーズ）も加味して決めるべきと考えます。（例）過去の良き遺産を守りつつ人の心や自然環境を大切にし、思いやりのあふれたコミュニティー作りを進める街
- ②まちづくりに当って住民参加を基調とし、市民と自治体行政との信頼関係の構築（パートナーシップづくり）する。（情報公開の内容の充実化）
- ③自治体職員も「まちづくり」のシクミを運営するスタッフとしての意識を持ち、縦割行政の意識から脱却し、横の連絡調整機能の充実を図る。
- ④その他

ア 越谷のヒートアイランド化についての原因究明とおもいきった対応策を打ち出す必要あり。

イ まちづくり景観のルールづくりが必要では。

- 市民の声を聞きながら計画に反映させてもらうことが必要だ。
- 青木先生に代弁していただいたが、やさしい町づくり大いに期待しながら、トイレの問題と各施設を循環する市内バスを検討してほしいと思います。どんな立派な施設があってもそれを利用出来なければ、ないのと同じ。特に高齢者になればステップ台の低い市設バスの運行が望まれます。
- 市民参加のシステムづくりについて官（行政）・民一体のプロジェクトチームをつくり、従来型のシステムの評価を含めて先ず参画という具体的な方法を話合う機会を作ったらどうでしょうか。今回のフォーラムに参加し貴重な勉強をさせていただきました。但し市役所（行政）の参加が予想を大巾に下回ったように感じました。市民の越谷に対する考え方を知る少ない機会を行政でも着実にとらえていただきたいと思います。

- ①越谷の森（明治神宮のような）公園ができれば良いなあと思いました。
- ②生活圏の中の福祉という視点を持って、学校の空教室を又は、公民館を利用した高齢者が楽しく過ごせる場、子と母親が1日すごせる場を共に実施できないだろうか？高齢者も子供達も母親も共に楽しめる施設が作れないでしょうか？
- ③②のことが、市内学童保育の充実にもつながるのではないのでしょうか。
- ④定年後の男性が、充実した残りの人生をすごせる事を探っていけるような、場があってもよいのではないか。

⑤公園の砂場に日陰（藤棚）などをつけて欲しい。バスケットゴールなどの遊具（小さい子用、大きい子用別々に）、のぼりおりしてあそべる階段なども欲しい。

⑥田んぼがどんどん消えて行くのがとても残念です。「農家への市民ボランティア」あれば参加して、農家へお手伝いに行ってみたい。

●開発とは緑をへらし自然をこわしてそのぎせいの元に出来ているように思います。だんだん緑がへって来ているように思います。そこで駐車場を作る場合は廻りに木を植えて持主において管理するようなくみを義務付けたらどうでしょうか？

●コミュニケーション。民生委員組織の活用が望ましい。

●まちづくりは行政だけでなく、市民皆のまちづくりにしなければと思います。

●田村先生の住み心地の良いまちつかい（まちづくり）に合う環境豊かなまちづくりを主題にした第3次総合振興計画が望みます。

●最も重要な点は住民参加であろう。市の施策に、市民がどれだけ意見を言っていけるかで、今後の方向が決まるのだと思う。ぜひ市民の声を反映できるよう審議会などの公募をすすめていってもらいたい。

今日のシンポジウムについては、障害者から見ての街づくり、という観点がなかったようで残念である。

●①シンクタンク等が行なう調査は誘導的にならないように注意して欲しい。一般的な項目でなく、越谷市及び地域特性をしっかりとふまえた項目で調査して戴きたい。

②全体計画を各地域の誰が調査するのか？全体の整合性をどうするのか？

③情報化に対応した話がない。その他抽象的・観念的・雑談的なフォーラムであった。

●自然環境優先のまちづくりをしてほしいと思う。私は平方に13年住んでいる。来た時は今からでは想像もできないような自然があった。様々ないきものもいた。例えばヘイケボタルはたくさんいた。最近ホタルの里づくりが流行っているが、やはり自然の状態で発生してくるものでなければ単なる装飾品でしかない。自然の水路がコンクリート護岸化され、ホタルがいなくなってしまった今、ホタルを放虫するのではなく、ホタルが発生するような水路に変えていけばいいと思う。

緑のネットワーク化をすすめてほしい。現存する自然を守りつつビオトープ（創造も含めて）ネットワークを進めてほしい。

田村先生がおっしゃったように長い目でみれば、環境優先イコール人間優先となっているものである。夏になると毎年行われる消毒（殺虫剤）散布のあり方を考えなおしてほしい。可能ならやめてほしい。人体への影響、生態系への影響。また、小中学校に行われる消毒は、児童に対してはかなり注意しないとならないと思う。また、学校ビオトープで生き物を呼ぼうとしているのに殺虫剤を大量に散布するとはどういうことか。

●意見が出せるための情報提供を十分行って下さい。

●平成10（1998）年8月制作

発行・編集 越谷市企画部企画課

〒343-8501 越谷市越ヶ谷4-2-1

TEL 0489（64）2111

印 刷 三栄印刷株式会社